
白く輝く帆の下で 一北の州長の奮闘記一

岡屋いまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白く輝く帆の下で ー 北の州長の奮闘記ー

【Nコード】

N 6 4 9 4 X

【作者名】

岡屋いまき

【あらすじ】

平和な日々を重ねていたクロワサント島にある日、北の大陸口ウノームスからの使者一行がやって来た。

ところがその一行は流行病に侵されており、島にも病の猛威が広がって、島民の八割近くが亡くなってしまふ。

北の州長の息子の僕は復興途中に亡くなった父の代わりとして、遠縁の大人達のお飾り州長に祭り上げられ……。

その日。(前書き)

記載。

きい様から「あとはまゝかゝせうたゝ(笑)」と、ぽうんと飛んできた設定・話の流れをそのまま使用しているので、合作に近いです。

というか、合作にしよう。と声を掛けたのですが、個人名義でOK。と言われてしまいました……。

不定期更新ですが、楽しんでもらえると二人とも喜びます。

その日。

その日、僕は太急ぎで港へ向かっていた。

「でかいんだって？」

「おう！ 北の大陸ロウノームスから来たらしいぞ！」

「正式な使者一行だつて聞いた！」

「お――――！！！！！」

走つて向かう途中、あちこちから出て来る顔見知りや友人達と合流した。

目的はみんな一緒、話にだけは聞いていた北の大陸ロウノームスから来た大きな船を見に行くのだ。

父である州長のところへ知らせに来た港の管理者によれば、その船にはロウノームスからの正式な使者一行が乗っているらしい。

「エイブ。何が起きるか分からないから、お前は家にいなさい」と父は言ったが、そんな言いつけなんて聞けるはずがない。

見つからないように、父が港へ向かった後、少し間を置いて、僕も家を出た。

だいたい父は過保護過ぎる。

母が数年前に高齢出産に挑み、弟か妹と共に亡くなってしまった時から特に。

それから父一人子一人でやって来ている。

父の気持ちも分からないでもないが、来年１１歳になれば、僕も青年の家で完全に集団生活に入るのだ。

そろそろ子離れしてほしいと僕は常々思っているが、州長館である家と青年の家が隣に建っている事を考えると道は遠そうだった。

港には既にたくさんの人が集まっていた。

その間を縫って、僕は何とかロウノームスの船が見え、なおかつギリギリ話が聞こえる位置まで進んだ。

ただし父に見つかって、後からお小言を食らいたくはなかったのだ、最前列には出ない。

「大きいねえ」

「おう……」

ロウノームスの船はクロワサントの帆船とはまるで違っていた。まず、大きさ。

そして船体の側面の両舷から、数多くの太い棒……櫂が突き出ている。

あの櫂をロウノームスでは奴隷と呼ばれている人達が漕ぎ、船が進むという事を、僕も話でだけだが知っていた。

僕が住んでいる州は、クロワサント島の最北部にあたる。

北の大陸ロウノームスに一番近く、他の州よりも大陸の情報が多く入ってくる。

僕の父がくじ運の悪さから州長となり、州長の住む村＝州都には、ロウノームスから訪れる商人がますます増えた。

ちなみに父よりもくじ運の悪い島長は、ちょうど山脈を越えた南の州の麓付近に住んでいる。

ロウノームスからの商人にすれば、直接船で乗り付けられるこの州の方が便利に違いない。

だが正式な使者ともなれば、島長の住む島都へ行つてほしい。とても派手な使者及び随行員一行に、父はそう伝えている。

それを聞いた使者は、突然に話を変えて来た。

「話はよく分かった。時に州長殿、この村に医師はいるか？」

実は船の櫂漕ぎ奴隷達の多くが病に罹っていて、今無理をすると帰りの漕ぎ手まで失い兼ねない。

島都へ行っている間、病を診て頂きたいのだが」

「医師はありますが、一体どのような病でしょう？」

そう父が尋ねたのに、せっかちなのか使者から詳しい説明は全くもらえなかった。

「診てもらえれば分かる。我々は早速島都へ向かわねば……っ」

「案内をお願いしたいのだが」

「もちろん礼はきちんとする」

「行ける所まで船で進み、途中からは馬車で進む事になりますが、宜しいですか？」

「かまわん。宜しく願います」

正式な使者に行く先々で騒動を起こされては適わないし、万が一遭難なんて事になりでもしたら目も当てられない。

父は慌てて、帆船を準備させ、島都までの案内人を頼んだ。

休憩も一泊もなしに使者は島都へ出発したが、使者達は威張っている感じがするし、接待せずに済んで良かったと思う。

ノウロームスの使者と随行員を見送った後、父は入れ違うようやって来た医師達と一緒に、船の中へ入っていった。

が、あっという間に出て来て、口々に叫び出した。

「みんな！ 村中の医者を呼んできてくれッ！」

「それから何か消化に良さそうな食い物ッ」

「150人分頼むッ！ 症状が重い奴はどこかに寝かせないと……ッ」

「ここから逃げ出さないようにだろうが、3人一組で足を鎖で繋がれて、明らかに全員栄養失調だ。

これじゃあ治るものも治らん」

父は船から降りると、州長館へ向かった。

近くの村に医師の派遣を依頼する手紙を書くのだろう。

最後まで父に見咎められずに済んだと思う間もなく、僕も心当たりの方向へ走り出した。

ノウロームスの糞漕ぎ奴隷達が何の病なのか、どの医者も答えを出せなかった。

対処療法で船から清潔な屋内へ身柄を移して隔離し、熱さましや鎮痛剤を飲ませた。

最初は栄養失調等の長い間の奴隷生活がたたった病だと思われていたが、しばらく経つとそれだけではないのが分かった。

ロウノームスからやって来た病は感染力が強く、しかも致死率が異常に高かったのだ。

そうと分かった時には手遅れだった。

病は僕の住む北の州に留まらず、最終的にクロワサント島全てに広がっていった。

「州長！ 家族がやられた！ 貯蔵してある薬草を分けてくれ……
っ！」

毎日こんな風に村人達が州長である父を訪れた。

ばたばた人が倒れ、医師もいなくなり、感染は体力のない老人や子供から次々と命を奪っていく。

もうすぐ冬になるというのに、貯蔵していた薬草は底を尽いた。

感染を防ぐ為、他州は州境を閉ざしており、無理に越境する者が出た事から、関係も悪化し、助けは期待出来ない。

他の州もきつと助けるどころではなく、それぞれ対応に追われている事だろう。

「……薬草はもうない。とにかく体を冷やして熱を下げてください」

そう言って、父は村人達を追い帰した。

その頃、僕もまた病に感染していたのだ。

「……お父さん、これ。さっき、もうない……って」

「……。……いいから、飲め。飲んで元気になるんだ、エイブ」

僕の為に父が嘘をついてまで手元に残した最後の薬草湯を、僕は飲んだ……。

その日。（後書き）

くじ引き

クロワサント島では1年に1回、コメ（もどき。以降コメで統一）の収穫祭の時にくじ引きが行われている。

くじ引きは基本的に村単位で、全ての村人が役割に付くようになっている。

村長・相談役などから、田園への水路整備係まで、20歳以上の全ての人がくじを引き、土地も同様に割り振られる。

くじ引きは、個人的な交換なら可能だ。

州長は10年に一度、その年村長になっている全員でくじを引く。

村長は1年で交代出来るが、州長は10年間も交代出来ない。

州長を引いてしまった人は、村長も10年間兼任で勤めなくてはならない。

そして島の代表〃島長も、州長のくじ引きの5年後、現島長の州を抜かした州長9人でくじを引き、大当たりを引いた州長が島長となる。

つまり10年間、村長兼・州長兼・島長であり、島長のくじを引いたくじ引きに非常に弱い村長の村は、10年間島都と呼ばれる。

州長になった。

父が死んだ。

過労死だった。

息子を助ける為とはいえ嘘をつき、最後の薬草を隠匿した、という後ろめたさの為か、父はその埋め合わせをする如く、身を削って州の為に働いた。

「お父さん、まだ起きてるの？」

「もう少ししたら寝るさ。先に寝ていなさい、エイブ」

「お父さん、ご飯は？」

「さっき済んだよ。エイブは成長期なんだから、ゆっくり食べるんだぞ」

「お父さん、少しは休まないと……」

「ああ、そうだな。これが終わったら……」

僕には父が罪悪感から働き詰めになっているのは分かっていた。

だが、その明らかに我が身を顧みない州長振りを心配せずにはいられなかった。

それなのに何度同じ様な言葉を繰り返しても、父は州の為に働き続けるのを止めようとはしなかった。

父が亡くなって数日も経たないうちに、遠縁の者が僕に御託を並

べ出した。

「亡き州長の遺志を継げるのは一緒に付いて回っていた君しかいないよ、エイブ君」

「州都以外から集まって来ている人達にも一番顔を覚えられているでしょうし、エイブ君が州長を引き継ぐべきだわ」

一体何を言っているんだ、この人達は……。

「僕はまだ十五歳の子供です。州長など僕には無理です」

とてもではないが、僕は父の様に動く事など出来はしない。

州都再建に向けて動いている皆だって、15歳の子供にアレコレ言われたくないだろうし、まとめ役などどうしたって無理だ。

「ちょうどいい機会です。新たな州長はくじ引きで決めませんか？」

だからクロワサント島のこれまでの制度通りに戻そうと、くじ引きを持ち出したのだが、遠縁の者は意見を引かず、更に言い募ってくる。

「今はまだとてもくじ引きなど出来る状態ではないさ」

「くじ引きをして働く場所が変わってしまったら、それこそみんな混乱して復興が遅くなるじゃないの」

しかしきつと遠縁の者達の心の内は違うのだ。

くじ引きとなれば、遠縁の者達が面倒を見なければ、15歳の僕は孤児として、青年の家に入る事になる。

そして自分達と関係ない者が州長になれば、遠縁の者達も当然州

長館から出なければならぬ。

それは復興のおこぼれに預かれなくなるという事を意味している。州長館に留まる為に、僕を州長の座に据えたいのだろう。

だというのに、一見その意見が道理に適っていたのが問題だった。

遠縁の者達のそんな内心を知らない、復興仕事のまとめ役として動いている親方達を含む大人達が、その意見に賛成してしまったのだ。

働き過ぎる父が心配で側にいただけなのに、それが返って仇になるなんて僕は思いもしなかった。

「僕はくじ引き制度を復活させたいんだけど、どんな風に言えば大人達を説得出来ると思う？」

堪り兼ねて僕は生き残っていた同年齢の幼馴染達に相談した。

てつきり州長を固辞すべく一緒になって考えてくれると思っていたのだが。

「くじ引きなんて無理だろ」

「無理よ」

「無理無理」

と、一刀両断されてしまった。

その上、青年の家に住む皆は、幼馴染を皮切りとして、僕の思惑とは反対にこぞって州長になれと言い募ってきた。

「俺はエイブ以上に青年の家を気に掛けてくれる大人はいないと思

う」

「エイブが出て行っても、遠縁の奴等は理由を付けて、州長館から出て行かないかも知れないぞ」

「うん。エイブは辛いだろうけど、州長館に留まってほしいなっ」

「小さい子の面倒を見るのはエイブじゃなくっても出来るけど、青年の家を少しでも守れるのはエイブだけだよな」

未だに16歳になると大人と一緒に復興仕事に駆り出されるので、15歳は青年の家にいる子供達の中で一番年上だった。

幼馴染達も、年下の子達を守ろうと自然と責任感も沸いているのだろう。

そして最後には、州の最高齢者である、北の賢者おばあちゃんの鶴の一声に止めを刺された。

「エイブ。気持ちは分かるけれど、今はくじ引きなんてしている時期じゃあないよ。お前が州長におなり」

「おばあちゃんまで……」

僕はがつくりと肩を落とした。

おばあちゃんは賢者として名高く、流行病が拡がる前から世話役として青年の家に住んでいる。

流行病さえも乗り越えて、足腰目耳と弱ってはいるが、杖さえ持てば歩ける。

青年の家の女の子達が、おばあちゃんの世話役を交代で受け持っていた。

そんなおばあちゃんの勧めもあり、気は進まないが僕は推される

ままに州長になった。

ところが、何かあったら父の指示に従っていれば大丈夫だという北の州の大人達の意識が、僕にとって大きな問題となってきた。

少しずつだが父の代わりに、遠縁であり同じ州長館に住み、父の補佐していた者達の指示に従えば、北の州の復興は進むという意見が増え、最終的に復興の全権を遠縁の者達が握る事になったのである。

生前の父は遠縁の者達に、青年の家の孤児達の世話も頼んでいた。

しかし、ある時。

僕は青年の家の子供が州長館で食器洗いをしているのを見つけてしまった。

更に、遠縁の者の部屋から掃除道具を持って出てきたりするのに出くわす事が多くなった。

気が付くたびに僕が代わろうとすると、「怒られる」「大丈夫だから」と断られ、遠縁の者に対し怯えてもいる様だ。

「あの子達はあなた方の召使いじゃないんです」
そう僕が言っても。

「大袈裟だな、エイブ君は」

「手が空いていそうだから、ちょっと頼んだけよ」
そんな風に遠縁の者達はまるで取り合おうとしない。

その上、青年の家に回す分の物資や食料を、遠縁の者は着服しているらしい。

しかもそれは年を追うごとに酷くなっていた。

本来なら１１歳から１９歳の青年達が共同生活する青年の家は、僕の憧れの存在だ。

今はそんな憧れや羨ましい場所には程遠い。

２・３歳から１５歳まで、身寄りのない子供が住み、州長館付属の召使いとして援助を受ける側に回っているのだ。

くじ引き制度復活がまだ早いというなら、せめて青年の家を本来の状態に戻したい。

１６歳になってしまうと、幼馴染達は大人扱いとなり、青年の家から出なくてはなくなる。

そうになると、今より接点を持ち辛くなるに違いなかった。

だからあと１年で本来の状態への方向性が付けられる様に……。

幸いというべきか、お飾り州長として、考える時間だけなら僕にはたくさんあった。

でも、どこから手を付けていけばいいのだろうかと、おばあちゃんに相談を持ち掛ける為に僕は青年の家へ向かった。

「そうだねえ……」

おばあちゃんが僕の考えを吟味するように黙り込むと、それを側で聞いていたその日のお世話を受け持っていた幼馴染が力説して来

る。

「まずご飯のおかずをもう一品希望！ 最低生活脱出！！」

青年の家に回るはずの食糧を僕も遠縁の者達と一緒に口にしているはずで、思わず謝罪が口をつきそうになった。

でも僕からの謝罪など、幼馴染が望んでいるわけではない。

謝りさえすれば僕はその分気持ちになるだろうが、青年の家の現状は全く変わらないのだ。

建設的な事を考えようと、耐える。

まず飢えたままでは仕方がない、という事だ。

州の復興と、青年の家を本来の状態に戻すのでは規模が違うが、父も食糧確保から動いていた事を僕は思い出す。

「確か、前は田んぼや畑を青年の家で独自に持っていたよなあ？」

「うん。今はその場所の収穫物も州都の物になっちゃってるけど……」

「じゃあ駄目か……」

元は青年の家の田畑だったのだから返してほしいと頼んでも、遠縁の者達が頷いてくれるはずがない。

「山で山菜採りは？ 薬草も摘める」

さすがに父の様に、雪山で狩りなど僕には真似出来ないが……。

「それならたまに思うんだけど、どれが食べられるのかがよく分かってなくて。」

それに小さい子の面倒も見ながらだから、あんまり奥までは行けないだろうし」

黙って、幼馴染と僕とのやり取りを聞いていたおばあちゃんが口を開く。

「エイブがお探し」

「え、探すって何をですか、おばあちゃん？」

「青年の家も州長館にも植物事典があるじゃろうから、それを探し出すんじゃよ。」

どれが食べられるか、それとも駄目なのか、覚えるまでそれを持つて採りに行くのさ」

「そっか、なるほど」

「それに山や野だけじゃないんだよ。」

州都はすぐ近くに海もあるんだからね、砂浜で海藻や貝が採れる。波が高くない日を選んで行けば、小さいお子等が一緒でも大丈夫じゃろう」

「海藻や貝の事典も僕が探すんですね」

「そうじゃ。まずはそこからさ、頑張るんだよ、エイブ」
そう言つて、おばあちゃんはにつこりと笑った。

ただお飾りになっただけではなく、お前にもちゃんと出来る事があるんだよ、と僕は言われた様な気がした。

「はい。じゃあ早速探してみます！」

「私もこの事をみんなに伝えとくから」

「うん、頼んだ！」

僕は駆け出した。

州長になった。（後書き）

青年の家

クロワサント島の島人は、生まれてから最初の10年は親元で過ごす。

6歳から10歳までは通いで、『青年の家』で日中過ごす。

11歳から19歳までは、青年の家での集団生活。

青年の家での生活の間に、どんなくじを引いても大丈夫のように、基本的な職業訓練が行われるのだ。

青年の家は、基本的に村長（州長）の家の横に建てられている。間に敷居はない。

日常生活（食事洗濯農作業田植えなど）を、子供達それぞれで世話しあう。

その子供達の先生役&相談役として、年配になり田植え労働がきつくなった老人達があたり、仕事の仕方をビシビシ鍛えた。

中には100歳を超える長老もいて、知恵者として大事にされている。

相談役のくじは老人達に回すのが、くじにおける暗黙の約束になっていた。

始動する。

僕がお飾り州長になった頃から、何とか病の流行は下火になり、州も落ち着きを取り戻し始めていた。

州都に集まって来ている人々が、北の州全体の生き残りならば、9割の住民が亡くなっている事になる。

親や身寄りがいる子供達と、青年の家にいる子供達は、今はそれぞれ住む場所は違うけれど、元は近所に住んでいたりして仲良しだ。

「あ！ バナちゃん、みんなでどこ行くの〜っ？」

「これから、海へおかずを採りに行くんだよ〜！」

「海に、おかず？？」

「海藻とか〜、貝とか〜、なんだって！ 一緒に行く？」

「うんっ、行く行く！」

「でもね、大人には内緒だよっ！ 子供だけの秘密なのっ！」

「分かった、秘密だねっっ」

そんな風にして秘密の仲間の一員は増えていく。

一緒には出掛けられないが、僕も後から覗きに行つて、砂浜でキヤーキヤー騒いでいるのが青年の家の子供達だけではない事に気付いて、嬉しく思う。

「わあ！ エイブお兄ちゃんも来た〜！」

「頑張ってるね〜、バナ！」

「うんっ！ 病気は海から来たけど、海にはちつとも関係なかったんだよ。だってこんなに気持ちいいもんっ」

ロウノームスの船はこの病気はおかしいと気付いた時点で、父の指示により燃やしてしまった。

もし海の生き物にも流行病がうつるなら、一面死骸だらけで腐った臭いがするに違いない。

バナは僕よりも8歳年下、青年の家の女の子だ。

年長者に引っ付いている年齢でもないが、年下に手取り足取り教えられるほど面倒見が良くなっている歳でもない。

青年の家の中での着替えや食事中ならともかく、今は外に出ているのだ。

ご飯がかかっているというより、同年代の子供と遊んでいたのだろう。

僕は面倒を見なくてはならない小さい子供を連れた幼馴染を見た。

「調子どう？」

「楽しいよ。本と一つ一つ照らし合わさないといけないのは大変だけど。」

それにいっぱい採れそうだから、一日では食べきれないかも。

赤ちゃん貝は採らないで、海に逃がしてねって言うてはいるけど

……」

「そっか。配るわけにもいかないしなあ」

「大人には内緒なんだよ！ エイブお兄ちゃん！」

話を聞いていたバナに諭され、笑った後すぐ大真面目に頷いた。

「そっだよな、うん。内緒内緒。」

……手伝えなくて悪いけど、早速おばあちゃんに相談してみる。
潮が満ちる時間には気を付けて」

「はい。頑張つてね、エイブ州長様っ」

黄色い声援を向けてくれたのは嬉しいが、州長にしかも様付けまでされて、僕はガツクリと肩を落とす。

「……頑張りたくない」

「駄目！」

「……はい」

何が出来る訳ではないが復興の進み具合を見ようと、色々な場所に寄ってから青年の家に僕は帰った。

おばあちゃんに海で幼馴染が言っていた保存方法について尋ねると。

「干すか、佃煮だねえ。一度茹でてから、塩漬けでもいいよ。そうすると傷み難くなるのさ。」

……そうかそうか、海は健やかだったんだね、有り難や」

まず保護者と一緒に住む子達を家まで送り届けてから、青年の家に帰って来たらしい皆を僕は州長館の窓の内からこっそり見ていた。

その表情は明るい。

砂浜で拾ったり、食べ終わった貝殻は綺麗に洗い、腕輪や首飾りにしたり、重ねてくっ付けてちょっとした置き物にしたり、食べるだけでなく皆で楽しんだ。

僕が後から聞いた話によると、潮が満ちてくるのを始めに気が付いたのはバナだったらしい。

始めに言い出したバナに、

「もう少し大丈夫じゃない？」

と答えているうちに、あれよあれよという間に波が押し寄せて来たのだそう。

「良く分かったなあ、バナ。偉いぞ」

「えへへ」

照れたバナの頭を僕は撫でた。

日々本を片手に子供達が食材探しに海や里山へと出掛けるのを僕は見送る。

始めは大人には秘密の行動だったのだが、青年の家の子供達以外にも一緒に行っていたので……まあ、少しずつバレた。

「今日はどこに行ってたの？」

「秘密！」

「あら、そうなの？」

ここまでは良いとして、

「……お母さん、食べられる貝と食べられない貝があるって、知ってた？」

新たに仕入れた知識を、子供は大人に披露してしまうものだからだ。

保護者達にしても、子供達が団体行動してしてくれた方が安心だし、ちゃんと帰りは家まで送り届けてくれるのだからと、黙認した。

そのうちに手の空いている大人も一緒に行ったり、自分のところの子供も団体行動に混ぜてほしいと頼んで来たりし始めた。

その上、これはOK、これは駄目、こんな料理が美味しいよ等々、知識を伝えるようになり、食糧調達に向かう子供達の行動範囲はますます広がっていった。

大人達の裏からの協力に支えられながら、青年の家の子供達が食糧調達をするようになってから、しばらく後。

遠縁の者が探るような目をして、僕に聞いて来た。

「隣の孤児達と何かやってるんじゃないか、エイブ君？」

「隣の皆は、最近、海や山に遊びに行ってるみたいですよ」

「エイブ君は行ってないのかい？」

「はい。僕はほとんど付き合えてません。そのうち飽きるんじゃないですか？」

州長館に取られている分の食い扶持を自分達で稼ごうとしているんだ！　と言いたいが、今邪魔をされるのは困る。

僕は苦しい言い訳をして誤魔化した。

遠縁の者達は召使いがいなくなったら困るとでも思っているに違いない。

でも僕も自分が100%善意から、青年の家を元の状態に戻そうとしている訳じゃない。

最後の薬草を私物化した罪悪感から、父が州の復興に文字通り命を懸けたように、その薬草を飲んだ僕は、青年の家を元の状態に戻せば贖罪になると、心のどこかで思っている。

もちろん、くじ引き再開もしかり……。

もし薬草の件がなければ、僕だって遠縁の者達のように、手に入れた権力を手放すまいと、青年の家の幼馴染達の事など放っておいたかも知れなかった。

とにかく遠縁の者達に疑われ始めている事を伝えておこうと、僕は青年の家へ向かった。

すると待つてましたとばかりに、幼馴染達に引っ捕らえられる。

「エイブ！ 小舟の直し方、知ってる？」

「たぶん州から逃げ出す時に使って、射掛けられた小舟だと思うんだけど、浜に打ち上げられてるのよ」

「直すのが分からなかったら、小舟を作る方法でもいいぞ」

「え、ちょっと待つて……」

戸惑う僕に、幼馴染は更に口々に言い出した。

「船があれば、魚釣りに行けるだろ」

「貝や海藻を食べ続けても何ともないんだもん。海の魚も食べたい！」

「釣りつて、どうやるんだっけ？」

「糸の先に餌を付けて、んで〜？ あと網で獲ったりもしなかったっけ？」

「ちょ、ちよつと……」

せ、せめてメモしたい……。

しかし僕の制止など、幼馴染は聞いちゃいなかった。
ひたすら自分達の言いたい事だけを述べて来る。

「余ったら、魚も干せるらしいよ」

「他に魚の保存方法ってあるのかな〜？」

「調べといて！ エイブ！！」

様々な言葉に押し潰されそうになっている僕を助けられるのは、
おばあちゃんしかいなかった。

「ここらこら、お前達。エイブが困ってるじゃあないか。」

さすがに私にも分からないんだよ。助けになれなくてすまないね
え、エイブ」

「そんな事ないです。十分助かりました、おばあちゃん」

幼馴染達からの猛攻撃を止めてもらえただけで、とは口に出すと
後から怖いので言わなかったが。

「ええつと……。まずは船から？」

「そうだよ。調べ物が色々あるんだから、今度はちゃん文字が読める子に手伝ってもらんだよ、エイブ。」

「何もかも全部自分一人で調べなくっちゃって、しよい込む必要はないからね」

「はい、おばあちゃん」

「おばあちゃんに言われて、僕は随分気が楽になったのを感じる。」

「僕にとってのおばあちゃんのような存在が、父にはいたのだろうか？」

「もしいれば、父は死にまではしなかったのではないか……。」

「ところで、エイブ。しばらくの食材も確保出来たし、みんな外で集団行動するのにも慣れてきたから、隣村まで出掛けて、田んぼと畑を始めようと思ってるの」

「隣村？」

「そういえば海や里山に行く前、流行病前に青年の家が持っていた田畑の事が話題に出たつけど、僕は思い出した。」

「そ、弁当持参でな」

「州の生き残りは州都に集まって来てて、周りの村は放置されて寂れてるだけのはずだし」

「農具とかもそのままだといいいんだけど」

「あとは苗種だよ〜」

「だよな〜」

僕なら何とかしてくれるだろうという、幼馴染達の期待の籠った視線を無視したい。

「ころころ、お前達っ」

「だって、おばあちゃん……」

「だって、じゃあないよ」

「はぁい」

「……おばあちゃん、ありがとうっ」
僕は内心涙した。

始動する。（後書き）

クロワサント島

クロワサント島は太い三日月の船が転覆したような形をしている。

島の外周は砂浜では続いてはおらず、所々は切り立った断崖が続いている為、歩いて巡ると半年近くは掛かるのではないかと言われている。

島の中央には東西に、雲が垂れ込めると頂上が隠れてしまうくらい高い山脈の峰々がいつも連なり伸びている。

そんな高い山には雪が降る事もたまにあるが、基本クロワサント島の気候は高温多湿で、山脈の南側は特に雨が多かった。

山脈はクロワサント島の南北を隔てる州境となっていた。

更にその南北も、山脈を源流とする川でそれぞれ5個ずつの州に分かれ、クロワサント島は計10の州で成り立っている。

州は、一番左から西南の州、西北の州、南西の州、北西の州、南の州、北の州、南東の州、北東の州、東南の州、東北の州と呼ばれている。

初めての舟。

「みんな、今日は本を探す手伝いをしてもらえないか？」

次の日、たまたま雨で外に出れなくて、青年の家で暇を持て余していた年下の子達に僕は声を掛けた。

「舟の本を見つけたら、僕のところを持ってきて欲しいんだ」

「昨日見つけた小舟の修理の本？」

「そうだよ」

さすが青年の家。

情報伝達早いなあ。

「どんな本でもいいから、舟が書いてあったら持ってきて」

簡単な文字しか読めない小さな子供達にも声を掛けた。

みんな一斉に本棚に殺到し、次から次へと持ってくる。

僕はどんどん本に目を通していった。

一通り目を通して思ったのは、舟に関して全くの初心者である為、僕らが必要としている舟の修繕や造船に関して書いてある専門書は、ただ字面をなぞっただけでは今一つピンと来ないというものだった。

所々に使われている専門用語も意味不明である。

その内容に戸惑ったのは幼馴染達も同様だった。

「うがっつ。分からんっつ」

「なんで舟に油がいるの？」

「う~~~~~ん」

みんなで頭を抱えていると、

「さすがに本だけじゃ無理かねえ」

「おばあちゃん」

おばあちゃんとも話し合いの上、やはり一度舟に詳しい人に相談に乗ってもらおうという事になった。

僕らの行動を陰ながら支えてくれるお母さん達に、話を持ち掛け、そこから更に秘密を共有してくれそうで、舟に詳しい人を紹介してもらった。

偶然にも、バナの幼馴染のお母さんのお父さんだった。

「久しぶりだ、バナ。元気だったか？」

「……おじさん誰？」

「お前の父ちゃんの仕事仲間さ。まあ前にあったのは、お前が生まれた時の時だったからな。覚えてるわけないよなあ」

「……お父ちゃん？」

「お前の母ちゃんも知ってるぞ。お前は二人によく似ているよ」
懐かしそうにバナの頭を撫でている。

話のきっかけに出来ればと思ってバナを連れてきたけれど、娘さんから聞いていた通り、バナの両親は親方に随分と気に入られていたらしい。

「……お疲れのところ、すみません」

もちろん遠縁の者達がない時間を見計らうのは忘れない。

「子供達の悪巧みの相談に乗ってやってくれって言われて何かと思えば、お前かぁ、エイブ」

早速、相談に訪れた家で、初っ端僕は笑われた。

「そんな、人聞きが悪いです。他言無用でちょっと……じゃなくて、色々と質問したい事があるだけで」

「それを悪巧みしてるっていうのさ」

変な風に話が伝わってしまったているのか？

いや、親方のこの表情だと、ただ単にからかわれているか、面白がられているのだろう。

「それで、何を教えてほしいって？」

「ここが分からないんですけど」

僕は予め持参した本を見せる。

「ああ、これはな……」

基本的に僕達子供に仕事を教えてくれる大人は、人柄がイイ人
〓復興仕事をする者達をまとめる親方達や、その手伝いをしている
人達が多かった。

だから僕の名前も知っていたのだ。

今回のお願ひ相手が親方で、顔を何となく知っている程度の面識
しかない大人相手じゃない事に、僕は大いにホッとしていた。

「それにしても、どうした、エイブ？ 今北の州に舟などないだろ

うが。なぜ舟について聞いてくる？」

「友達が、難破している舟を見つけたんです。直して使えば、魚釣りに沖に出れるかと」

「海に出るだと?!」

「ええ」

「馬鹿な！ 病は海から来たんだぞ！」

娘さん以外のすべての家族を流行病で亡くした親方の気持ちは分かる。

北の州のほとんどの者が、同じやるせない気持ちを海に対して抱えているだろう。

だが、ここで止めるわけにはいかない。

この村は海と共に生きてきた。

海こそ僕らの復興のカギなのだ。

「親方、海は変わりありません。北の州の病が終焉したように、海の病も終焉したでしょう。」

変わらず僕たちに豊かな恵みをもたらしてくれています」

「だが。もしかあつたら……」

「大丈夫ですよ。前は病に負けましたが、それは病について何も知らなかったからです。」

今は病がどう進むかどんな症状が出るか分かっています。早期に対処を行います」

「うゝむ」

どうやら話を聞いてもらえそうだ。

僕は親方に、青年の家が目指す『ご飯のおかずをもう一品希望！』の話を聞いてもらった。

さすがの親方も、青年の家の実情は気付いてなかったらしい。整理されず、つかえる僕の話、真剣な顔をして聞き続けた。

今日は朝から舟の修繕である。

最初は青年の家の子供達と親方による口頭のやり取りだったのだが、そのうちに村全体が参加する、雨の日の恒例相談会に広がった。

最初は難破船集めだった。

まずは使えそうな木板に付いた貝殻を削り落とすところから始まり、木板の損傷部分の交換・修繕・そして組み直し。

そして帆の作成方法。

それらを紐ロープで繋ぐ。

木板の継ぎ目には、繊維を練り込んだ防水油を詰め込んで隙間を埋める。

浸水防止としても、油は全体に塗っていく。

「この結び方は舟以外でも使えるからな。この際、しっかり覚えてとくんだぞ！」

「はい！」

「指ぬきを忘れるな、自分の手を縫うなよ！」

「わわわ……っ」

「ずっと水が浸かっている部分はどうしても脆くなりやすいが、そのつど修繕していけば何十年も乗れるからな！」

「おおッ！」

操船方法に、網の修繕方法や、竿の手入れ、餌の付け方も一から教わり……。

それらの教えを新たに書き残し、纏める役は僕に押し付けられた。なぜなら。

「もっとキレイに書きなさいよ、読めないでしょっ！」

「誰これ書いたの、汚いわね〜」

と、女の子達から散々に言われ。

「あいつら、やいやいウルセエんだよ」

「だから頼むな、エイブ」

「な……っ。僕だって文句言われたくないんだけど……」

やる時はやるし、しっかり口もアイデアも挟む幼馴染達（男）が、文句を言う幼馴染達（女）を恐れて、字を書く作業を僕に押し付けたのだ。

書き写しが間違いないか、書いてはみたものの、やっぱりここが

分からない等々。

何度も親方の所に聞きにいった。

だが、『ご飯のおかずをもう一品希望！』が州都全体にひっそり浸透したのに、まとめ役は僕のまま。

その内、書類作成は僕に押し付け、州の事務仕事まで僕担当だと周知定着してしまった。

押し付けられるたびに僕は、

「やって下さいよ」

と言うのだが、誰もが、

「任せたぞ。よつ、纏め上手！（笑）」

と、取り合ってくれない。

仕方なく仲間に、

「お前らズルイ」。僕も書類作成以外で動き回りたい」

と愚痴を零しつつ、それらの仕事をきっちりこなしていった。

州の事務仕事で唯一嬉しい誤算だったのは、書類作成という最終的なを僕が行っているので、遠縁の者達がただの書類預かり係になり、実権がほぼなくなった事だ。

もう復興のおこぼれにはあずかれない流れになっていると、ちゃんと気付いてくれますか……叔父さん叔母さん……。

初めての舟。（後書き）

ある日のエイブ

朝、起床。

昨日終わらせた書類を見直し。

遠縁の者達と朝食を取る。

収集に出かける青年の家の子達と一緒に村まで出かけ、書類を届ける。

州長館に戻って、出来ていない書類と今日頼まれた書類の作成。
「ぐう……。分かん。前はどくなつてたんだっけ？」

ゴソゴソゴソゴソ……。

「……読めない」

「おい、エイブ、これ頼む」

「親方がいいところに！ コレ教えてほしいんですけど！」

「おう。これこれこういう訳だな。こうなっている」
「なるほど」

「教え賃に、こいつも頼む」

また増えた！ しかも……！

「ぐがあ！ 読めないじゃないですかあ！」

「おう。だから清書をな。こいつは道具と人を借り出す書類だ」
「じゃあ、とうとう?」

「おう！ 始めるぞ！ 青年の家の奴らに明日の朝、港に来るよう伝えてくれ」

「わかりましたっ!」
打って変わって、自然と声が弾む。

「頼んだぞ」

去っていかうとする背中を呼び止めて、もちろんお願い!
「僕も乗りたいです!」

「手持ちの書類が全部終わってたらなっ」
「親方、ヒドイっ!」

終わる訳ないじゃないですかっ! 次々もってくるのは誰ですかあ!!

ちよつと落ち込みながら、おばあちゃんとお昼ご飯。

「どうかしたのかい?」
「明日、始動するそうです」

「そうかい。じゃあ今日中に潮の流れや海底の様子を書いてある地図を探さねばね」
「……ワカリマシタ」

明日、舟に乗れないのは確定です…。

午前中頑張って、書類をだいぶ片づけたのになぁ……。

午後いっぱいかけても見つからない地図に、涙目になった僕。

「おい。エイブが搜してるのはこれ〜?」
幼馴染が薄い大判本を持ってきた。

中を見て、

「こ〜れ〜だ〜〜〜っ!」
叫んでしまったっ!

「借り一つなっ!」

「おうっ、貸しとくっ!」

明日親方に渡さねばっ! と意気込んでいた僕は、ニヤニヤと幼馴染が眺めて来ているのに気付かなかった……。

抱負。

食糧確保の足掛かりを作った状態で、幼馴染達は次々と16歳になり、青年の家を出て行った。

保護者がいる幼馴染達も同様に、大人達の仕事に交じっていく。

予想していた通り、仕事を始めた事で、どうしても接点が少なくなっただが、幼馴染達は一緒に働いている大人達の現状やこの先どうしていききたいかの意見を集めてくれた。

集めるだけではなく、青年の家やくじ引きの復活についても、尋ねてくれている。

「あれ？　いつもお前等、くじ引き復活は無理って言ってたのに？」

どういう風の吹き回しかなど、僕が問い掛けるれば。

「エイブがあんまり何回もくじ引きくじ引きって言うから」

「そうそう。青年の家の食糧確保が上手くいったし、くじ引きも…
…と思うわけ」

これまで全然話を聞いちゃくれなかったが、どうやら僕の粘り勝ちらしい。

「流行病の後にも赤ちゃんは生まれてるもん。このまま病が下火続きなら、そのうち人が増えて、州都だけじゃ皆を賄えなくなる」

「そしたら隣の村とかに自然と移住する事になるんだろうけど、その移動先の土地とかが早いもん勝ちじゃ、不公平になるに決まっ

てるよ」

「そう考えると、やっぱりそうなる前に……くじ引き？」

「かなあ……」

「だろ！ くじ引きだよ！」

僕はここぞとばかりにしっかりと頷き、力説した。

集まって来た北の州の人々が州都に収まっているうちに、くじ引き復活を成すべく、僕は幼馴染達とすっかり顔見知りになった大人達から説得していく事にした。

書類を頼みに来た時に、

「親方。ちよつと相談が……」

そう話を持ち出す。

「おう。なんだ？」

「新しい船を作りたいんですけど、作れそうですか？」

「新しい船かあ……」

「ええ。今幼馴染と話してたんですが、村のみんな結構海に出るようになったそうじゃないですか」

「ああ。そうだなあ」

「そうすると、今ある船じゃ足りなくなりませんか？」

親方は悩んでいるようだ、畳み掛ける。

「うーん。今でさえ不足気味だからなあ」

「でしょう？ だからこの際、新しい船を作っちゃうのはどうかな

と」

すると親方は少し考え、そして賛成してくれた。
「まあ、みんな舟の修理はお手の物になったしな。新たな船を作るのも、皆のやる気が起きそうだ」

「ですよ！ 計画お願いしてもいいですか？」

「おう！ ただし書類は任せたぞ！」

しかし、それを聞いて僕はガツクリだ。

「えゝ。たまには自分で書いて下さいよゝ」

「わしの字は汚い。お前も読めんって言ってただろうが」

「そうなんですけどゝ。たまには僕も皆と一緒に働きたいです」とも言ってみるが、親方には通用しない。

「しょっちゅう混じってるだろ？」

「そりゃあ、書類ばかり見てるのは飽きますもん」

「お前の字が一番きれいなんだ。任せるよ」

「ちえゝ」

そのまま親方は州長室を出ようとするが、実はまだ本題がある。

「あ、親方！」

「うん？ どうした？」

「それで、新しい船なんですが、管理をどうしようか悩んでるんで

す」

「うん？　今まで通りわしがやるぞ？」

「ええ。何も言わずに甘えちゃおうかなと思ったんです。実は」

「おい。言ってくれるなあ」

親方は呆れている。

僕も親方に任せてしまうのが、一番楽だろうとは思っけれど、それで進んではいけないのだ。

「でも、どんどん船が増えて来たら、親方1人に任せるのは甘えすぎだと思っんです」

「だなあ」

「それで、何かいい手はないかなと思ったんですけど、何も思いつかないんですよ」

僕は悩むふりをして、親方に尋ねる。

「昔はどうやってたんですか？」

「昔かあ……」

おっしやあ。

親方に、くじ引きしていた当時を考えさせる事に成功！

あんまりくじ引きを押しても、子供の戯言に取られちゃうし、今回はこれでいいよな。

「あ、親方。もう1つお願いが」

「……おう？」

次は何を言い出す気だと警戒されているらしく、親方の返事にはほんの少し間があった。

申し訳ないと思いつつも、僕個人にとっては大事な事なので続ける。

「新しい舟の木材の切り出しに行く前に、叔父達に声を掛けてもらえませんか？」

「うん？」

「確か叔父達の誰かが山の村の出身で、僕らじゃ分からない木材について教えてもらえるかもしれないんです」

「ああ。確かになあ」

「よろしく願います」

「おう。長い目で見てやらあ」

親方に叔父達の面倒を押し付けしてるのがバレてる……。

でもくじ引きに戻すなら、州長館のお荷物状態の叔父達にも動いてもらわないとマズイ。

大仕事を請け負ってくれる親方を最敬礼で送りだし、僕は甘える事にした。

さらに、色んな人に声を掛けていくと、どうやらおばあちゃんもこっそり人を呼び寄せては諭してくれているらしく、

「その話、おばあちゃんにも言われてなあ。考えてみたんだが……」
という事が時々あった。

話が早いのは助かるし、仕事を始めて数年の若人達に言い出されるよりは、北の賢者であるおばあちゃんからの提案の方が受け入れやすいし説得力もあるに違いない。

少しずつ前に進んでいる実感を得ながら、頑張ろうと自分にエールを送った。

そんな風に働き掛けを行っている最中、事件は起きた。

青年の家の7人と、村の子の3人が、夜になっても帰って来なかったのだ。

誰も出掛ける姿を見ていないので、どうやら日の出前からそれぞれの家を抜け出したらしい。

てつきり晩御飯まで遊び回っているのだらうと、この時間まで大騒ぎにならなかったのだ。

大人から子供まで、手が空いている人総出で探し回る事になり……
…そして魚釣り用の帆船が一艘なくなっている事に気付く。

僕が目を覚ました時には既に晴れていたが、地面には大きな水たまりが残り、まだ緑色をした葉も落ちて、滴がぼたぼた垂れていたのを思い出した。

きつと短時間ながら、突発的な大雨風に見舞われていたの違いない。

そのせいで子供達の乗った船が、沖へ流されてしまった可能性があった。

「おーーーーーい！！ 聞こえたら、返事をしてくれーーーー
ーーーーッ」

海に向かって叫んでみても返事はない。

日の出前に抜け出したのなら、もしかすると火種を持っているだろうが、真っ暗な海に灯りは見えなかった。

魚釣りの時は必ず陸地が見える沿岸で、と教わっている。

海から見た州の様子や、遠くからでも見えるクロワサント島の山脈の形も、海に出る全員が覚えさせられている。

しかし普段釣りに出ている日中の太陽の位置なら、何となく覚えているかも知れないが、夜の星の位置まで分かっている子は果たしているだろうか……。

そもそも晩御飯までに帰らなければ、騒ぎになると分かり切っている。

そして騒ぎになれば、秘密どころか怒られると……。

それなのに帰って来ないという事は、帰れなくなっているのだ。

お昼ご飯と水くらいは持っていっただろう。

だが突発的な大雨風で転覆は免れても、何の目印もない大海原で彷徨う事になれば、子供達の命は絶望的だった。

「僕のせいだっ！ 僕が海に出たといって言ったからっ！」

物凄い後悔が押し寄せてきて、僕は叫ばずにはいらなかった。

「お前のせいじゃないっ！ おれ達が言い出したんだっ！」

「そうよっ！ ちゃんと見てなかった私達が悪いのよっ！」

青年の家を出るまで、一緒に暮らしていた幼馴染の方がいてもたってもいられないだろうに……。

「いいえ。それを言うなら私達」

「そうだ。自分達が忙しいばかりに、子供達だけで行動しても、問題ないと思ってたんだから」

子供を心配する親の方がよっぽど辛いに決まっているのに……。

「お前達のせいじゃない」

「おちつけっ。誰が悪いと言い合っている場合じゃないっ」

「そうだ。まずは子供達だ」

「大きなかがり火を上げるのとはどうかしら？ 遠くからでも見えるように」

「ああ。いいな。急いで準備だっ」

みんな無事でいてくれ。

祈る事はみな同じだった……。

抱負。（後書き）

州長館

村長館・州長館・島長館、そう違いはありません。

実質ちよつと大きめの宿屋。

村の住民以外の人を泊める為に作られたようなもので、昔は村長のくじに当たった村人の普通の民家が館を兼ねてました。

館の住民は村長一家。

基本的に、宿屋部分に、プライベートな空間と、村長室、書類保管室が追加になります。

食事は、村長一家と宿泊客が一緒に取ります。

（希望を出せば、別を取る事も可能）

宿泊客が多い時は、近場の村民が手伝いに来ます。

（役割分担もくじ引きです（笑））

館の目印は、隣に立っている青年の家と、貯蔵物資や共有機材を入れる蔵。

館よりも、両隣の建物の方が大きく目立ちます。

迷子と三枚帆の帆船

僕は10年前と同様、家を飛び出し港へ向かっていた。

遭難していた子供達が1人も欠ける事無く、帰って来たのだ。

しかも帆が3枚も張れそうな、遠洋用の大きな帆船に乗って……！

「全く全く全く！ あいつらッ！」

「全くだ！ 心配掛けさせやがって！」

本当なら港に留まっていたかっただろうに、僕が事務に追われている州長館まで知らせに来てくれた幼馴染と、子供だけで海へ出た事を思う存分叱ってやると意気込む。

自分が言い出したせいで、子供達は遭難した。

もし子供達が帰って来なかったら、例えまた幼馴染や保護者達が庇って、許してくれたとしても、とてもじゃないが居た堪れない。

どう償っていいのかも分からないし、子供達の命は償いきれるものではなかった。

遭難から日が過ぎ、子供達の生存の可能性が低くなるにつれて、僕は北の州から逃げ出す事ばかりを考え、せめてその前に頼まれている書類だけはしっかり終わらせておこうと、かがり火を灯す寝ずの番以外では州長館に籠っていたのだ。

事務さえも子供達が遭難した事実から、目を逸らす行為だった。

だから実際帰って来た子供達の姿が見えた途端、大急ぎで走ったせいで声は詰まるし、おまけに目から汗まで出て、僕の視界は完全に滲んでいた。

「エイブお兄ちゃんまで泣いてるよう」

「当たり前だつ！ほんとに心配したんだぞつ！」

拳骨を喰らわし、しっかりと抱きしめる。

良かった。

10人ちゃんとそろっている。

揉みくちやにしてくる親方の腕をすり抜けて、最後にバナが僕に駆け寄って来た。

「エイブお兄ちゃんなら褒めてくれるよねっ？バナ、一生懸命潮と風の流れを読んだんだつ。」

ほかの皆はぜんぜん駄目なのつ。バナ、頑張ったよっ」

「うん、うんつ。よく、……よくやったな、バナ！おかえりっ！」

「えへへ、ただいまっ！」

10人全員を抱きしめて、やっと僕は落ち着いた。

よく見ると帰ってきた子供達は、みんな揉みくちやにされ、目を白黒している。

元気そうではあるけれど、ちょっと顔色が悪い。

「バナ、お腹すいてないか？」

「すいてる〜。おにぎり食べた〜い」

「焼きおにぎり〜」

「ぼくはおもちがいい〜」

「善哉だと更にいいよな〜」

……強者がいる。

当然、皆から一斉にどつかれていた。

「もうすぐお昼だし、今日はみんなでここでお昼にしませんか？」

「だな。今日は仕事になりそうにない」

親方が乗ってくれた。

「じゃあ、ちようどいいかねえ。一緒に色々持ってきてもらったんだが」

「おばあちゃんっ!」

一斉にバナ達がおばあちゃんに駆け寄る。

「うん。元気そうだね。良かったよ」

「おばあちゃ〜んっ!」

抱きついてバナ達が大泣きしだした。

「おばあちゃん。お足のほうは？」

「大丈夫だよ、女の子達が連れて来てくれたからね。みんなも元気

「そうだね」

「はいっ」

周りの大人達が、おばあちゃんにくつついた子達を引き取りながら、淒く嬉しそうに声を掛ける。

おばあちゃんに面識のない大人達は、周りから聞いて、

「北の賢者?!」

一斉に驚いた。

「だろうなあ。」

年配の者は病で皆亡くなっているし、おばあちゃんが生きてるのは奇跡だ。

「おばあちゃん、椅子」

「ああ。ありがとう」

「エイブ、すぐに食べれそうな物ばかり持ってきたよ」

「気が利くなあ。ありがとう」

周りを見ると、かがり火から火種を取って簡単なかまどを作り、おもちやら干物やらを焼き始めていた。

さすがおばあちゃんと青年の家の女性陣。

「おにぎりあるっ?」

「あるわよ」。ご飯は炊けてるから、急いで握るわね」

「やったあっ!」

さっきまで大泣きしていたのに、ケロッツとしてバナもおにぎりを

握りに行ってしまった。

「家から何か持ってくるわ」

「うちも」

「鍋とかお皿とかもいるわよね」

みんな一斉に動き出した。

「エイブ、良かったねえ」

「はい……っ」

僕がおばあちゃんに頭を撫でられ、ちよっとぼくっとしてしまっている間に、宴会の準備が終わってた。

おばあちゃんを中心に円座になって、子供達から詳しく話を聞いた。

突発的な大雨風に見舞われて流されてしまったまでは想像通りだったのだが、流れ着いた先がどうやらロウノームスに行く航路の途中になる小島だったらしい。

なんと、その小島には真水の水場まであったそうだから。

子供達はその小島に座礁していた大きな帆船の損傷の具合を見て、水没しないぐらいまで手を入れて、州都まで乗って帰って来る事にしたのだそう。

幸運と、バナの才能がなければ、とても無事では帰って来れなかったに違いなかった。

次の日の朝早く、僕は三枚帆の帆船を見に行った。

「皆を連れて帰ってくれてありがとう」

帆船に感謝を囁き、眼を閉じしばらくメインマストに抱き着いていた。

「……エイブ、いいか？」

「わあっ。びっくりさせないで下さい、親方っ」

後ろを見ると、親方と数人の大人がそろっていた。

「すまんすまん。ちょっと話があつてな」

「はい」

しまった。

どれだけ抱き着いたままだったんだろう。
恥ずかしすぎる。

「この船の事なんだが」

「どうでしたか？」

「うん、いけそうだ。ただ大分手を入れなきゃいけないみたいだ」

「そうですか、お任せします」

「おう。任された」

快諾してくれたけれど、親方の表情が晴れない。
後ろの大人達も顔を見合わせて落ち着きがなかった。

「座りませんか？ 話が長くなりそうです」

「分かるか？」

「はい。この船の管理についてですね」

「そうだ。お前が常々気にしていた事が、この船で一氣に大きな問題になった」

「はい」

これまで舟は村の共有で、好きな時に使う事が出来た。

だが、この船は特別なのだ。

遠洋にも行く事が可能で、しかも大きさが桁外れ。

誰かの一存で動かすのは危険すぎる。

一氣にざわざわしだした大人達と円陣を組み、僕らは船の上で時間をかけて相談をした。

僕が20歳の秋。

州都の皆の意見を何とか取りまとめ、北の州は他の州に先駆けて青年の家の状態を元に戻し、更にくじ引き制度再開に漕ぎ付けた。

そして幼馴染の1人に押し付けられたくじを見て、僕は棒立ちし

て固まる。

「あ、あのゝもしもし？」

それは、州長のくじ。

それをなぜ自分が押し付けられるのか、サッパリ謎だ。

しかし幼馴染は涼しい顔をして、告げる。

「エイブに貸し1つって言っただろ？」

「いつの話だよ！ 覚えてないぞ？」

「ほら。前に、海図の大判本を探してやっただろ？ その時の貸しを、今コレで返してもらおっかな！」

「な……っ」

言われて初めて思い出した、借り。

「って事で決まりな！ よろしく！」

「……。……や、いやいや、でも。まずいだろっ？」

15歳からもう5年間もお飾りやってたんだぞ、僕。更にもう10年は、職権乱用、腐敗の元凶だって！」

なかなか理論的な切り返したと思ったのだが、幼馴染の涼しい顔は全く崩れなかった。

「大丈夫だろ、うん」

「……おいおいおい」

「誰も反対しないって」

「そうそう」

幼馴染達に押し切られ、更に親方にまで睨まれた。
州長を引き受けないと承知せん！ という意味らしい……。

そうして僕は州長を続投する事になってしまったのだった。

迷子と三枚帆の帆船（後書き）

新造帆船

「静かにな」

「おう。ばれてないよな」

「……大丈夫だ」

オレと幼馴染は、体調が悪いのを押して港に来ていた。

オレが設計した三枚帆の帆船が、新航海に出る前に焼き払われようとしていたからだ。

このまま沈められるのは悔しく、幼馴染と相談して焼き払われる前に、海に航海に出す事にした。

行く当てのない乗組員のいない航海だが……。

「……手伝おう」

後ろから声を掛けられた。

「親方っ！」

「しっ！ 静かにっ！」

声を掛けられ、ビビった俺達に親方が落ち着けと手振りしてくる。

「……親方、体調は？」

「お前達と同じだ。だからこそ来た」

「親方……」

「行くぞ」

「はい」

親方が連れて来てくれた先輩達と帆船に乗り込んだ。

「こいつを一の島に連れて行くぞ」

「え？」

オレ等はハモってしまった。

「こいつは絶対残しとかなきゃならない。これは奴も同じ気持ちだ」

「州長が……」

「帰れない旅になるが着いてきてくれるか？」

「もちろん覚悟の上です」

「おしっ！ 出港するっ！」

「はいっ！」「」

暗闇の中、静かに帆船は出港した。

他州の人々。

僕が州長を続投した頃から、北の州には他州から人が流れて来る様になっていた。

クロワサント島の現在の全体像が知りたくて、僕は進んでそんな人々の話を聞くようにしていた。

「どこからいらつしゃいましたか？」

「島都……南の州から、だ。」

「病はどうなってます？　どんな状態ですか？」

「島都にはロウノームスからの使者が逃げて来て、滞在していたせいで、9割近くの住民が死んだ。今は鎮静状態だ」

「ロウノームスの使者は無事に島都に着いたんですね」

「ああ。着いてくれない方が良かったな」

「そうですね」

ロウノームスの使者達がちゃんと病について報告してくれてれば、クロワサント島の被害はここまで広がらなかったはずなのだ。

「使者達がどうなったか知りませんか？」

「奴等は皆死んだと聞いた」

ああ、恨んでるなあ。

僕もロウノームスの使者の対応に思う所あるし、当たり前だよな

あ。

「ご飯とお風呂を用意してあります。今日はゆっくり休んでください」

「ありがとう。仲間と家族、よろしく願います」
「はい」

基本的に逃げてくる人達は家族連れが多かった。
皆一様に疲れ切っている状態だった。

「自分は南西の州からここまで逃げてきたが、聞いたところによると7・8割は亡くなってるみたいだ」

色々な州から人が流れてきた。
どうやら流行病はここ北の州と、島都の南の州が一番酷かった様だ。

それにしても……。

「おかしいよなあ。なぜ北の州はこうなんだ？」
「まったくだ」

他州から流れてきた人々の話を聞いていると、つくづく感じるのだが、北の州の女性陣は遅い。

危つくそれを声に出そうとした時、いつから聞いていたのか、思わず顔を見合わせた僕と幼馴染（男）のつぶやきを、しっかり拾った女性陣の声が割って入って来た。

「もちろん私達がしつかりしてるからよ」

例えば、後先考えずに走り出すように発案するのが僕だとしたら、そこへ辿り着くまでの段取りや道筋を整えていくのは、大概において女性陣だった。

それに追いつ立てられるのは男性陣で、そうされる事でやる気も出たし、散々助けられもして心強いのだが……。

僕といい、幼馴染（男）といい、女性陣には全く頭が上がらない。

そんな女性陣を押さえ付けるとは、他の州は何と恐ろしい事を。そして非常に勿体無い事をしているなあと思う。

「そうだねえ」

「うん。お前達のおかげだ」

「当然よ！」

あゝ、やばかった。

離れていく姐御な幼馴染達を見送って、僕等は冷や汗を拭いた。

北の州と他州の違いは、流行病後の対応の差だろう。

北の州はクロワサント島における流行病の元だったから、ここ最近まで他州から人が流れて来なかったのも一因かもしれない。

クロワサント島は本来男女同権で、女性は子供を産む存在として大事にされている。

流行病の前はくじ引き次第で、村長・州長・島長を女性が勤める事もあったくらいに。

しかし流行病を防ぐ為の州境封鎖に始まり、食糧や薬草の統括等は、どうしても力づくによる対処が多くなる為、自然と現場は男性が指揮権を握るようになっていった。

流行病による世情不安で、荒事に対応したそれぞれの州長もしくは、その州長の血縁者が治安部隊の隊長が権力を持ったのだ。

指揮権〃決定権。

人口が減ってしまった為、餓死者が出るほどではなかったが、ここ数年クワワサント島は不作気味で、流行病全盛期にはその収穫を行う人手がおらず、また収穫物の分配は権力を握った者の個人的認識で行われ、更なる不公平と格差がもたらされているらしい。

「最初はまだマシだったんだ」

「ああ。年々酷くなっていったな」

「お前の所もか」

「ああ。そっちも？」

「だな」

1人が言い出すと、また別の場所から声上がる。

「今では州長とその周りだけが豊かで、あとは皆喰うに困る者が増えるばかりだ」

「うちもその口だわ」

僕は思わず不思議になり、質問を挟む。

「州長に諫言する事は出来なかったのですか？」

「最初は居たんだ」

「だが、あまりに病の広がりが酷すぎた」

始まりは、州境の警護や収穫物の保護などの治安維持部隊だったのに、今では州長の権力保持に使われていて、都合の悪い人間は排除されていくらしい。

州長に諫言出来る人が居なくなり、ますます貧富の格差が広がる一方だという。

「どうやって州境を越えて来たんですか？」

さらに問い掛ければ、口々に逃げ出した際の様子を答えてくれた。

「オレは、州境を見張っている人物が情けを掛けてくれた」

「お前、誰かに口答えしたのか」

「分かるか？」

「当たり前だ」

「そんな貴方はどうなのよ？」

「なけなしの金をはたいて見張りを懐柔したさ」

「同じかつ」

話を聞いていた人達がお互いに肩を叩き苦笑いした。
苦笑いだが笑顔が見れた。

良かった。

「州境はまだ閉ざされたままなのですか？」

「自由な行き来は許されていません」

「たまに他州から商人が州長の所に来ているって聞いたわ」

「州境で金を渡すか、州長からの通行許可印を貰っているらしいな」

「あとは、俺達みたいに無断で抜けて来るかだな」
「確かにっ」

今度は大笑いになった。
いい事だ。

僕もつられて笑ってしまった。

相変わらず州境は閉ざされたままだが、流行病が蔓延していた時のように、見つかったが最期死罪という事はないらしい。

これまでの北の州と同様に、流行病の発生時から、くじ引きはどの州でも行われていない。

くじ引きが行われていたら、ここまで権力の集中は行われなかったんじゃないかと、話を聞きながら僕は思う。

色々な話を聞いた僕は頭を下げてお礼を言った。

「他の州の事を話して下さり、ありがとうございます」
「いやなに。こんな話で役に立っただろうか？」

「もちろんです。北の州にはここ数年ずっと誰も来なかったので、島の様子が分からなくて不安になっていた所だったんです」

「こちらこそ受け入れてもらえてありがたいわ」

「生まれ育った場所を、故郷を捨ててしまったという思いは消えやしないが、こちらでも聞いてもらえて少しスツとした」

「そういつて貰えると助かります。あと、何か足りない物とかありますか？」

他の州から来た人達には寂れた村の開墾に回ってもらっている。

もちろん食糧や道具などの援助はしっかりした為、大きな不満は出なかったが、本当なら故郷に留まっていたかった人達ばかりだ。

「こちらとしては定住大歓迎ですが、北の州の技術を習いに来た、とか、逆に授ける為に来たとか……とりあえずそんな風に考えてみてはどうでしょうか」

「ははは。技術習得希望の移動は20歳までだけだなあ」

「裏別名、嫁探しの旅だもんよお」

技術習得希望の移動間に恋愛関係が出来て、そのまま移動先で生活をするもあり。

その相手を自分の生まれた村まで連れて帰るもありなので、そんな風に呼ばれているのだろう。

「そついや、お若いの。州長らしいが、嫁はいるのか？」
「……うっ」

そうキタか……。

喉を詰まらせた僕を、嫁どころか、お嫁に来てくれそうな恋人もおらず、婿に迎えてくれそうな女性もいないと見抜いたらしい人々が表情を和ませた。

「まあ、がんばれやっ」
「……はい」

ちよつと半泣きになったが、とりあえず頷いておいた。

州長の嫁つて雑用係に来てくれる子いるのかなあ。
10年州長辞められないし。
ホント切実です……。

他州の人々。（後書き）

手紙

拝啓

父上、母上、お元気ですか。
自分は元気にやっています。

急な話なのですが、今度結婚することにしました。

相手は、たまに手紙に書いてたあの子です。

（分かるでしょうか？（笑））

5年前、製陶技術を学びたくてここまで来た自分ですが、こちらに来る前に『嫁さん連れて帰ってこいよ』という励ましを、そのまま実行する事になるうとは全く思っていませんでした。

裏別名、恐るべしです……。

今度一緒にそちらに帰ります。

皆に会うのも久しぶりだなあ。
今から本当に楽しみだ。

あ！でも大騒ぎにはしないで下さいよっ！
恥ずかしいですからっ！

では、また近日中に。

敬具

P・S・ 姉さんには絶対に言わないで下さいよ！ 姉さんにバレたら絶対お祭り騒ぎに巻き込まれる。頼みます。

「もう見ちゃってるのにねえ」

「ホントホント」

「……」

「楽しみねえ」

「ホントに」

座談会。

逃げてきた人達から他州の話を聞いた僕達は、おばあちゃんに愚痴りに来た。

「どう考えたっておかしい。人口は減ってるのに食べられない人が出るなんて」

「そうだねえ」

「皆で生産して平等に分ければ絶対平気なはずなのにっ」

「だなあ」

「お腹一杯食べられないのは辛いものねえ」

「まったくだ」

「うんうん」

そのまま晩御飯に突入し、青年の家の皆にまで愚痴っていた……。

「だがエイブ、クロワサント島は昔から村ごとの自治が決まりだからねえ」

「そうですねえ」

一見的にちゃんと治まっている他州に手を出す事は出来ない。

北の州に逃げてくる人は居るが少数だし、大多数の人達は平和に暮らしているからだ。

でもその平和は抑え付けられているからそう見えるというだけで、

しかも権力を握っている一部の人々以外は飢えている。

「え？ 援助物資を勝手に流す事は出来ないのか？」

「そうなんだよ。下手すりゃ村自治への干渉って事でこっちが非難されるんだ」

「お腹がすいてる人に対しての炊き出しもダメなの？」

「基本的に炊き出しは、その村の村長が音頭を取ってやるものなんだよ」

僕はむっつと呻る。

「変なの」

「その為の蔵物資だからなあ」

「なるほど」

頷きもするが、また新たな疑問が沸いた。

「あれ？ じゃあその村長が本当に変で、村民に助けが必要って時はどうするの？」

「その時は州長だね」

「州長が駄目な時は？」

「島長になる。争い事の最終判断も島長がするんだよ」

「へえ」

基本的には良く作ってある決まりなんだよなあ。

ちゃんと動いてればって所が、今回はネックになってるけど。

でも、どうにかして援助物資を送れないかなあ。

お腹一杯食べられない日々が続くのは、どう考えたってキツイ。

「他の州もとりのあえず喰うに困る状況からは抜け出させたいよなあ

……」

そう僕がついポロつと零すと、女性陣にニヤリと笑われた。

「やっぱり！ そろそろ何かやらかしたいって言い出すと思ったんだっ」

「え〜っ。あたしはエイブがまたいきなり全島でくじ引き再開って、唱えると思ってた。ちよつと予想と違ったなあ」

「ホントだよ〜。そしたらタコ殴りに出来たのに〜」

「学習能力ないのっ！ て、ねえ」

「……」

ひいッ、……言わないで良かった。

絶対ホントにタコ殴りされてるっ！

「こらこら、お前達」

「は〜いっ」

これだからエイブは……男共は……という話にまで発展しそうになったところで、おばあちゃんが止めに入ってくれた。

う〜〜。

相変わらずグサグサと、胸に刺さる事を言ってくれるよなあ。

ホントの事だから、反論出来ないけどさあ。

おばあちゃんしか女性陣を止められないし、居なかつたらと思うと恐ろしい。

もう青年の家に足を向けて眠れません！

そんな僕に、男性陣からは憐みの視線が寄せられている。さらには、肩まで叩かれた。

同情してくれるなら、止めてくれよ……。

僕でも女性陣の勢いを止めるのは、無理だと思っけどさあ。むしろ何倍返しを食らうのがオチだと、震えが走る。

ともあれ最終的には全島くじ引きに持つて行きたいと僕が思っている事を、絶対一言も言ってないはずなのに、既に女性陣は見抜いているらしい。

女って凄い……。

「でもさエイブ、簡単に言うけど、北の州だけで全島分の援助物資なんて無理だぞ」

「うーん、それは分かつてる」

北の州もだいたいぶ落ち着いては来たが、まだ復興途中なのだ。自分達の活力の元である食糧まで他人に分ける余裕はない。

あくまで我が身第一なのだ。

僕は父のように命までは懸けられない。

「それに他州の州長を通したんじゃ、そのまま着服されて本末転倒

……なんて事になるだろうし」

「そうだよなあ」

「えーっと、つまり、どこから・どれだけ・どうやってが問題なのか？」

「誰に。も問題だと思うぞ」

「うーっーっーん」

打って変わって、みんな真剣に考え始めた。

食えない人を助けたいのは皆も同じなんだなあ。

でもすぐに出来るもんでもないし、自分達も一杯一杯の日々を送っているのに。

ホントにいい奴等だよなあ。

「逃げて来た人達が頑張って開墾してくれてるおかげで、今年の収穫量は上がると思う」

「うん。これまで州長館で暴利を貪ってた人も、心を入れ替えたみたいだし、その分も浮くかなあ」

「ハイ。その節は叔父叔母を止められなくて、すみマセンでした」

ついに訪れた良い機会だったので、口調だけは茶化しつつ速攻僕は手を付いて謝った。

「いえいえ」

「はいはい」

それに対する幼馴染達の返事も実に御座なりだったが……。
でもそれで充分だ、お互いに。

「とりあえずその少し余裕が出来る分を、他州に持って行くのはどうかな？」

「ほらあ、エイブ。メモメモっ！」

「……また僕？」

「当然」

思いつきり不本意を態度で示したのだが、一斉に頷かれて僕の気分は途端にブルーだ。

僕ってお飾りじゃなくなってるはずなのに、州長ってこんなものなのか？

流行病前の父はどんな風だったけ？

内心ぶつぶつ零しながら、それでもしつかり文字に起こしてしまう僕って頑張ってるよなあ……。

「佃煮や干物なら日持ちするから、他州に回すのもいいかも」

「それ貰ったつ。海の生き物を食べても大丈夫だって、まだ知らない村があるかもだし？」

援助物資をどこから工面するかは目途は尽き、話題が変わる。

「離れてる州にまで運ぶのは大変そうだ」

「輸送方法も考えなきゃな」

「他州も舟を直してるかな？」

「海で他州の舟は見た事がないぞ」

「今度、逃げて来た人達に聞いてみよっ」

「ああ。いいね」

陸路で馬車の輸送より、先に舟が浮かぶなんて。

クロワサント島が島である以上、やはり海とは切っても切れない関係なのだと改めて思う。

「その時に信用出来る人も紹介してもらえるといいね」

「そっくだよねえ」

「州境は前より厳しくないみたいだし、連絡さえ取れば、食糧は渡せそっだもん」

ふと気が付けば、おばあちゃんが感心したように何度も頷いている。

「おばあちゃん……？」

「みんなしつかりこの10年の経験を生かしているねえ。そろそろおばあちゃんの知恵袋も必要なくなりそっで、嬉しいよ」

「なっ！ おばあちゃんはずっつとずっつと必要ですからっ！ 寝たきりになっても、口がきけなくなってもですっ」

僕にとって、おばあちゃんはその存在自体が癒しなのだ。

別に幼馴染の暴走だって止められなくなっただって、居てさえくれ

れば構わない。

ただ褒めて貰えるだけで本当に嬉しい。

おばあちゃんが居るといっただけで落ち着けるのだ。

おばあちゃんの口調はあくまで穏やかだったが、何だかすぐにでもいなくなってしまういそうな気がして、僕は立ち上がって駆け寄り、その手をぎゅっと握った。

座談会。（後書き）

クロワサント島の輸送

島の東西に山脈がある為、大量輸送をする場合は舟を使う事がほとんどです。

まず海路で目的地に一番近い港まで運びこみ、そこから川船に越し替え川を遡る。

ただクロワサント島の川は、山から駆け下りてくる急流が多く、川船を遡らせるために河岸から川上に引っ張っていく方法が良く取られました。

川がない地域への輸送は、馬車・牛車・驢馬車などに移し替え、陸路を移動します。

流行病の流行前は、青年の家の技術習得の為の移動による結婚などから、州間の移動も多く物流も盛んでしたが、

流行防止の為に州境が閉ざされた事により、物流が途絶え、エイブが他州への援助を希望し始めた時には、人が通らない為に陸路はどんどん消え、残っていても獣道に近い状態になっています。

抜け道と前契約。

「じゃあ、この道なら通れそうですね？」

「ああ。確か俺達はこの道を通ってきたはずだ」

クロワサント島の地図を覗き込み、僕らは話し合いを続けた。

まず陸路での輸送が消えた。

他州から来た人達からの情報で、この10年、人がほとんど通らなくなつた為に道が消えていたのだ。

残っている道も獣道に近いらしい。

獣道では馬車を仕立てる事も出来ない。

食糧は嵩張るし重い。

人力のみでは輸送は厳しい。

「そうになると、輸送は船だな」

「でもそうすると……」

「港だな」

話し合いを続ける中、さらに別の問題が出た。

「うん。港の現状はどうなってますか？」

「州都以外の港は、ほぼ使われてないと思う」

「まず人が居ないしな」

「でも州都の港はダメよ。見張りが多すぎるわ」

「う~~~~ん」

州都以外の港の現状が分からないとなると、座礁しない様に舟を動かすには、船頭の腕だけが頼りになる。

だが実際の所、北の州もやつと数年前に舟を扱い出した所だ。皆そこまで操船に熟練していないのだ。

そうなる、思い当たるのは……。

「バナに頼むしかないか」

「ああ。だがバナに頼むとなると、ちゃんと話は詰めとかないとまずいぞ」

帆船の船長〃舵を取る人〃航海の指揮者〃バナ という図式が頭に浮かぶ。

「うん。一度向こうの人に会って、ちゃんとお願いするしかないな」

自然の流れで僕は口に出したのだが、なぜか幼馴染達からストツプが入った。

「おい！ エイブが行くのか？！」

「当然っ！」

「うがぁ！」

「何考えてんだバカっ！ お前州長だろうがぁ！」

「俺らが行くっ」

そして一斉に、幼馴染達が僕の頭を押さえ付けてくる。

う、動けない……。

「何でだよ。お願いするなら、州長の僕が動いた方がいいだろ」
押さえ付けられながらも、僕は言っただが……。

「アホかつ！」

「お前が動いて何かあったら、北の州はどうなるんだよっ！」

「え。親方達もいるし。北の州は落ち着いてるし、大丈夫だろ」
何かあったら……なんて事を考えたらキリがないし、実際に僕の代わりなんていくらでもいると思う。
なのに、なのに……。

「もう喋るなっ」

「案内お願いできますか？」

「ああ。任せてくれ」

僕の頭の上で、話がどんどん纏まっていく。

「じゃあ、南西の州は」

「おう。オレが案内する」

「北東の州は？」

「おれだ。よろしく頼む」

どうやら島都がある南の州以外の、8州に物資を送る事に決まり
そっだ。

島都がある南の州へ下手に手を出すのは、時期尚早だろうという

判断から8州になった。

「大勢で行くと、見張りに見つかる可能性が高くなるんじゃない？」
「州境を越えるんだ。少人数で行くしかないな」

「じゃあ、コメの収穫までに戻ってこなきゃだし、8組送ってそれぞれ話を決める方が早くていいんじゃない？」

「いいね。各州にはそれぞれ案内役とボク等の1人でどう？」

「まあ、途中までは一緒に行けるだろ。それぞれの州に近くなったら分かれて行けばいい」

「いいですね。じゃあどこの州に行くか、こっちも決めときます」
「分かった」

ちくしょく押さえ付けられてる間に、どんどん話が決まっていくな。
）。

釣り舟の時と一緒だよ。
また仲間外れかよっつ。

「エイブ、次行くぞ」
「お前が北の州にいるから、俺達は自由に動けるんだ」
「そうそう。しっかり州長よろしくね」

「うっ~~~~」
やっと頭の上の重しをどけてくれた。

恨めしそくに幼馴染達を睨んでやったが、相手は笑って返しやる……。

くっそっ！　いつか絶対出かけてやるっ！！

いやいや、落ち着け僕。

このままだと今日の話し合いから絶対追い出される。

深く深呼吸し、次に話し合わなければならない事に頭を切り替えた。

「相手の当てはありますか？」

「ああ。ある」

「それは任せといてくれ。絶対変なのは紹介しない」

「はい。お任せします。あと援助物資ですが、貴方達が収穫した物を当てようと思ってます」

「おれ達の？！」

「ええ。貴方達の」

一斉にざわつきが起こった。

「北の州の者の中には、自分達にゆとりがある訳じゃないのに、援助物資を出すのはおかしいと考える者もいます」

「おい、エイブ」

確かに本当の事だが、なぜそれをわざわざ言う必要があるんだと幼馴染達は訝る。

それに対し、安心させるように微笑んで、僕は続けた。

「でも、貴方達は違う。貴方達にとって、他州の人達は仲間です。仲間に対する援助なら納得出来るし、それぞれの州長も目くじらは立てられません」

さらにざわめきが増えたが、無視して先に進めた。

「もちろん北の州の皆からの合意済みですが、こちらでも無断で援助物資は送れないんです。

なので今回は皆さんからの援助物資という事で、輸送費のみを支払いして頂く形になります」

「村自治か」

「うん。そう。ちょっとした抜け道だね」

「考えたなあ」

北の州として援助をしたくない人もやはりいたので、その点も配慮した結果である。

ホントに考えたよ。

考えすぎて頭の中がしばらく動かなかったぐらいだ。

「え？ 干物とかは今回なし？」

「干物は今回僕ら輸送は初めてだから、初めての契約者に対するオマケだね」

「オマケ！」

「それイイっ！」

一斉に場が沸いた。

「輸送費の代金は出来た時にお支払頂くという事で、僕等は皆さんの希望先に物資を運ぶ。

受け取った皆さんは州都まで運び、闇市場を開いて物資を捌く。という感じでどうでしょうか？」

僕は持ってきた流行病前の輸送に関する書類を見せ、さらに作ってきた書類をそれぞれに渡した。

「いいんじゃないか？」

「うん。ありがたいぐらいだ」

どうやら8等分した輸送費の請求書についても、避難して来た皆さん納得してくれたらしい。

「あれ？ これ物資を渡した後はどうなるんだ？」

ああ、気づかれたか。

「そこから先は、それぞれの州の皆さんにお任せします」

また一斉にざわめきが起こった。

「タダで配るのも良いとは思んですが、輸送費の支払いがありますからね。

こちらの輸送費分と、州都までの輸送を頼む分。

あと保管についても考えて、良心的なお値段にして貰えると嬉しいです」

「こちらで値段設定できるのか？」

「ええ。皆さんの方が他州については詳しいですから。いくらでな

ら購入出来るか、その辺はそちらで相談して下さい」

書類を見直して値段についての相談が始まった。

ほっと一息ついてると、横から

「なあ、引き渡しなんだけど、間違った人に物資を渡すとまずくないか？」

「バナだしねえ。ちゃんと決めといた方が良いつて」

「うんうん」

「……」

おい、バナ。

お転婆でおつちよこちよいなのは知ってたけど、青年の家の兄妹にここまで信用ないのはまずいんじゃないか？

つい胸の中で突っ込んだじゃったが、今回はバナよりも、間違いを出さない方が重要だ。

8州それぞれの担当になった人達が船に乗り込む予定なので、バナだけが物資を引き取りに来た人達と相對すると決まったわけではない。

しかし港の現状が分かるまで、海の状態を知る才能を持つバナは毎回参加する事になるだろう。

「どうする？」

「うんうん」

すぐにはいいアイデアが浮かばなくて、つい腕組みして悩んでいと幼馴染の1人が、

「あれはどう？」

壁に掛かっている鍋敷を指さして言うて来た。

「鍋敷？」

「うん。あんな感じで模様を木彫りして、半分に割って、絵が合ったら引き渡しをする」

「きれいだし、いいわね」

「きれいな物はバナも好きだし、早々無くさないだろ」

「「だな」」

決まりだ。

「8つ任せたっ」

「「任せたっ」」

「おれっ?!」

木工仕事が得意なダニアルに押し付けて、

「やゝ無事に決まって良かったね」

「「うんうん」」

「ちょっと待てっっ」

1人涙目なダニアルを置いて、僕は幼馴染達とほのぼの笑った。

$$\begin{array}{r}
 > \\
 & i \\
 & 3 \\
 & 4 \\
 & 7 \\
 & 9 \\
 & 9 \\
 & 6 \\
 \hline
 & 4 \\
 & 2 \\
 & 7 \\
 & 9 \\
 <
 \end{array}$$

抜け道と前契約。（後書き）

本契約

「じゃあ、これで決まりという事で」

「よろしく頼む」

しっかり握手をぼく達はした。

ここまで来るのが、まず大変だった。

なんでこんなに道が寂れてるんだよおおおおお！！

疲れてなかったら、絶対大声で叫んでたっつー！！

村で親方達から、

「エツド。お前達にはかり実行部隊を頼んでしまつてスマン。だ
がお前達が動かなければ、エイブが動くだろう。今エイブを北の州
は失う訳にはいけないんだ」

真剣にぼくを見つめ頼まれちゃった手前、途中で絶対へばれな
かったしな……。

それに親方の言う事はとてもよく分かった。

初めにエイブがくじ引きを言い出した時には、皆で一蹴したが、
今では他の誰でもないエイブが先頭に立っているからこそ、ぼく達
はこうして意見を交し合い、実際に動いているのだ。

「物資はコメの収穫が終わってから此方に持って来る事になります」
「頼むっ」

「……あと、これなんですが」

ぼくは胸元から木彫りのペンダントヘッドが付いた首飾りを引き出した。

「とりあえず、こっちは終わらせた。後は寝てからやるっ！」

ぼく等に1個ずつ押し付けるとぶっ倒れた、三晩完徹の超特急仕事をしたダニヤルの力作である。

ちよつとしみじみ見てから手渡した。

「これが物資の引換替わりです。物資受け取りの時には持って来て下さい」

「引換ですか？」

「はい。これがないと物資を渡せませんので必ず持って来て下さい」
「分かりました」

「ぼくがこの州の担当になっています。今だけじゃなく、平和になつてからも末永くお付き合い頂けると嬉しいです」

エイブだったら絶対言ってるだろう事を付け加え、契約書を持つ

てぼくは意気揚々と北の州に帰った。

出航。

今日の北の州はちょっと違う。

早朝から皆して浮き足立っている。

三枚帆の帆船“輝ける白”が、とうとう本格的に遠距離航海に出るのだ。

他州への援助物資の輸送を船ですると決めたその時から、使う船は援助物資の量からして“輝ける白”しかありえなかった。

親方には無理を言っつて、修理を急ピッチで進めてもらい、進水式もそこそこに僕等は練習航海に出港した。

なのに……船酔いした。

こんなに船が好きなのに、何でだよおおおお！

まあ、僕だけじゃなかったのは救いだったが、沖に出た途端に吐き気が込み上げ、役に立つ所か、皆に迷惑かけまくってしまった。

情けない……。

これは、航海乗員を慎重に決める必要があると、まず船酔いする僕と、同じく船酔いをする仲間がメンバーから外された。

さらに州民から出た乗船希望者のうち、身軽な者と青年の家のメンバーで、何度か練習航海を行い、その中でも特に海に強そうな年長者をベースに、今回の航海乗員は決定された。

もつともバナと、相手側の顔確認の為、8州の代表者と契約を交わした幼馴染達は強制乗船だ。

「いいな。危なかったら無理はせず帰ってくるんだぞ」
「行かなくてもいいのよ。陸から皆で運ぶって手もあるんだからね」

航海乗員の中で最年少なのが、バナ。

その最年少が一番重要な舵取りをするんだから、北の州の大人達は、もう皆が心配した。

バナの才能は、北の州の皆が認める所だが、今回の航海にどうしてもバナが必要だった訳じゃない。

だが、成功率を高める為にはバナが舵を取るのが最適だった。

まあ、強制乗船の幼馴染達ならバナの補佐として最強メンバーだし、周りの皆もきっとバナを盛り立ててくれる。

不意の事故があっても航海乗員の皆なら大丈夫だろう。

でも大海原を航海かあ。

気持ち良さそうだよなあ。

船酔い体質が恨めしい……。

今回の航海乗員の中には、無理矢理に自分の乗船を認めさせた猛者がいる。

「お前等が超ぶっつけ作業させた首飾りが、ちゃんと合うか気にな
って眠れないんだっ！ おれも連れて行けっ！」

ダニヤルが名乗りを上げたのだ。

「ダニヤルも僕と一緒に船酔い体質だろ？ 大丈夫？」

「ヤバくなったら“輝ける白”に木彫りして心頭滅却し、船酔いを
ブツ飛ばすっ！」

「練習航海中もそれで乗り切ったのか？」
所々に模様が増えている“輝ける白”を見回して僕は尋ねた。

「当たり前だ！ それに木彫り模様が合わなかった時に本物かど
うか分かるのは、おれぐらいだろ？ 修正もしたいから、どうし
ても行きたい」

確かに彫った本人なら確認出来る。

先に他州に渡す分だけ彫って、残りを後から彫ってたし、ちゃん
と模様が合うか気になる所だけど、好きな作業で精神統一し、船
酔いをぶっ飛ばしちゃうのは凄いなあ。

「超タイムトライアル作業を押し付けたのは、ぼく等だしね。ダ
ニヤルは練習航海でも船酔いをホントにぶっ飛ばしてたから大丈夫
だよ」

どうやらエッドが面倒を見てくれるらしい。

「まあダメでも命綱着けて海に放り投げれば、ダニヤルの目も覚めるでしょ」

「さすがフィシャリ」

「どういう意味よ」

睨まないで下さい。

青年の家出身の姐御達の中でも、一本筋が入っている貴女への賛辞です。

フィシャリが居てくれれば“輝ける白”は安泰だ。

ホントに航海乗員はバツチリ。

後は何事もなく無事に帰って来て欲しい。

「エイブお兄ちゃん、荷物積み終わった」
バナが僕の所に報告に来た。

とうとう出港だ。

今回の航海乗員以外はすべて“輝ける白”から降船し、残るは今回の乗員達のみ。

何故か僕の所に集まってきた乗員達と顔を合わせ、僕は右手の甲を上にして差し出した。

ババババツとその上に手が乗っていく。

最後に左手を一番上に乗せた。

「長い船旅になる。安全第一で行ってくれ」

「「おうっ!」「」

僕はギュッと上から押さえ付けられた手を下から跳ね上げ、エールを送る。

「おっしゅあっ! 出港するぞっ!」

「「おーーーーっ!」「」

一斉に皆がそれぞれの担当場所に散っていく。

“輝ける白” 皆を頼む。

メインマストを撫でてから、僕は後ろ髪を引かれるが振り向かず
に地上へと戻る。

「大丈夫だ。いざという時の対処法はしっかり教えた。」

親方が戻った僕の肩に、手を置いてくれた。

「はい。エッド達もそれぞれの州からの帰り道は覚えたって言うて
くれました」

「なら安心だな」

「はい」

沖へと進んでいく“輝ける白”を、その場からしばらく動けず僕は
追い続けた。

「エイブ、いい加減信用してやりなさい」

珍しく青年の家からおばあちゃんが出て来て、僕に声を掛けてくれた。

“輝ける白”が気になって、ここ数日上の空で仕事をしている僕を見かねたらしい。

「そうは言うけど、おばあちゃん」

「エイブ、お前の仕事は？」

「……北の州の州長」

「そうだ。お前の仕事は、出掛けている者がちゃんと帰ってこれる場所を残す事。今の日常を継続する事だよ」

「だけどっ」

「エイブは、仕事を任された筈なのに、任してくれた相手に心配されてばかりいるのは嬉しいかい？」

おばあちゃんの指摘に、ハッとした。

そうだ、僕は皆なら大丈夫だと思ったからこそ任せた筈だ。

「……嬉しくない」

「分かったようだね。気張りどころだ。頑張るんだよ」
「はい」

久しぶりに僕の頭を撫でってくれるおばあちゃんの手に、青年の家から会いに来てくれる程、僕は心配掛けてしまったんだと気が付いた。

「ありがとう。おばあちゃん」

もうしばらく頭を撫で続けて欲しくて、僕はおばあちゃんに頭を下げた。

出航。(後書き)

伝令

「伯父さん、お久しぶりです」

「元氣そうだな」

「はい」

久しぶりに会った伯父に会釈し、集まってくれた皆にも頭を下げる。

「北からの伝言を持ってきました」
場の緊張が一気に高まった。

今回の話にどれだけ皆の期待が大きいか、ビシビシ伝わってくる。

「物資の荷造りはもうすぐ終わり、間もなく船を出せるそうです」

伯父は肩を叩いてくるし、周りも皆、腕を叩き合い、握手し、涙を浮かべる者までいる。

だが、声は出さない。

北の州との違いをつくづく感じる。

こんな時、北の州なら口笛指笛お囃子万歳三唱のお祭り騒ぎだ。

北の州長が若いから？ いやここがそれだけ抑圧されているんだ

ろっ。

あ、伝言思い出した。

「伯父さん、もう1つ北の州長から伝言を預かってました」
「何だ？」

一斉に皆がこちらを見た。
ちよつと恥ずかしいんだが……。

「落ち着いたら、こちらに技術取得の希望者を送りたいそうです。
お願いしたいと言っておられました」

「裏別名、嫁探しの旅か」
「久しぶりに聞いたなあ」

懐かしそうに、皆がざわざわ語り出した。

「嫁探しでなら、一番に北の州長が来そうですね」
「そうなのか？」

「ええ。北の州で一番嫁取り出来なそうなのが、州長ですから」

本人を思い出して、つい吹き出しそうになってしまう。

もっと聞きたそうな皆に、北の州長とその幼馴染達のエピソードを、その夜知ってる限り延々と語ってしまった。

州長には悪いけど、楽しかったあ。

帰航。

「エイブお兄ちゃん、ただいま〜っ!」

「バナっ! おかえり〜、上手くいった?」

日常だ、日常を継続するんだと、“輝ける白”が帰ってきた事に気が付いたが、そのまま窓の外に気を取られながら、州長館で仕事を継続していた僕。

そんな僕の前に、バナが飛び込んで来てくれた。

「うんっ! バナ、頑張ったんだよ。……え〜っとな、こんな

感じだった〜」

そう言くとバナは数役こなしながら、エイブに状況説明をし始めた……。

***BGM・スパイ音楽っぽいの

静かな夜の海。

潮や風を読みつつ遙々北の州からやって来て、前もって取引場所と決めた港にあと少しで着くという夜、“輝ける白”の上から陸を見ていたバナは、陸からのランプの光に気付き、フィシャリ姉に目配せした。

「ええ。合図ね」

領いたフィシャリ姉は、足元に置いていたランプを持ち上げ、ランプの光を布で隠したり取り払ったりをゆつくりと何度か繰り返した。

すると向こうも決められた通りに返してきた。

「間違いない、物資の取引相手だ」

北西の州担当のガンディ兄も、バナに領いて来た。バナが周りを見回すと、仲間は皆領いてくる。

「よし、明日は“輝ける白”を港に着けよう。くれぐれも気をつけろよ、バナ」

「ええ、分かっているわ」

自分の役目は、今夜はゆつくり休み、明日の入港に備える事。後の事は夜勤の者に任せ、バナは寢床に入った。

翌朝、“輝ける白”はゆつくりとバナの読み通りに入港した。

「お久しぶりです」

「来てくれてありがとう」

「約束は守りますよ」

ガンディ兄が、相手の人としっかり握手を交わしている。

しかし顔を合わせても、すぐに物資は渡さない。

ランプの合図以外にも、取引相手の確認手順があるのだ……バナは問い掛ける。

「例のものは？」

「……ここに」

ガーンディ兄と握手していた人が、木彫りの首飾りを出して来た。

「貸してくれっ」

ダニヤル兄が引ったくり、手元にある8つの舟形の木彫りから一つを取り出し型を合わせる。

それはぴつたりと綺麗に嵌った。

「確かに……。合言葉を」

バナが言った途端、相手は狼狽する。

「そ、そんなの決めていたかつ？」

それを見て、バナはふつと笑った。

「嘘よ。でも、そんなに固くしてて大丈夫なの？　これっきりの

取引じゃないわ、まだまだ先は長いの。　気楽にいきましよう、お

互いにね」

「……はあ」

「ではこちらの物資を収めて頂戴」

バナは帆船に積んであった荷を見せた……。

バナの語りがここまで進んだ所で、バナの後から続々入り、一緒に話を聞いていた幼馴染達が吹き出した。

「ぶははははっ。もう我慢出来ねえっつ。そんな言い方してないし！
バナなんか、めちゃくちゃ緊張してたじゃん！」

「も〜〜雰囲気壊さないでよ〜っ！ ガーディ兄だって、カチコチだったでしょっ！」

それを聞いてバナは怒っているが、僕も笑う。

「通りで芝居がかつてると思ったっ」

「こんな風に報告された方が、エイブお兄ちゃんも楽しいよねっ？」
「うん。何かもうすっかり気分は闇取引！？」

実際、権力を握っている人達にすれば、それ以上の何物でもないのだが……。

「バナ、渡し相手の確認に使った鍋敷きほしいな〜。ホントに綺麗だったんだよ〜」

「うん。あれは綺麗だったわ。私も欲しいなあ」

おや、フィシャリからの褒め言葉が出た。
これは凄い。

「お部屋に飾りたいよねっ」
「いいわねっ」

実際に実物を見れなかった僕は、レプリカを作って貰う事にした。

「ご褒美でダニアルに作ってもらうといいよ」

「おいっ!？」

「ご褒美っ!？ やったっっっ」

ダニアルは渋るが、バナはもらっ気満々である。

「でもダニアル兄ってば、そのままでもバッチリ合ってたのに、
州の人が首飾りを出したら、引ったくってさ。さっそく手直し入
るんだよ」

「あれはちよつと邪魔だったわ」

「荷物運びの手伝いも無視だったね」

「すみませндеシタ。オワビに2人に鍋敷きを進呈シマス」

「やったあっ」

「悪いわねえダニアル」

「イイエ、ヨロコonde」

弱り切ったダニアルの顔が可笑しくて、つい大爆笑してしまった。

周りの幼馴染達も、ダニアルの肩や背を叩いて大笑いだ。

うん！ 今回の航海は大成功！
僕はホッと一息ついた。

後でそれぞれの州に確認に行った幼馴染によると、詳細はそれぞれ違うが、援助物資は無事に南の州を除く各州で開かれた闇市場で売りに出されたそうだ。

次が楽しみになってきたっ！

帰航。（後書き）

取引

静かな夜の海。

潮や風を読みつつ遙々北の州からやって来て、前もって取引場所と決めた港にあと少しで着くという夜、バナと皆はもう興奮しまくっていた。

「ある？」

「見えるか？」

「あれっ！ あれ違う？！」

「どこだっ！？」

みんな一斉に駆け寄ってくる中、バナは陸からのランプの光に興奮し、フィシャリ姉に飛びついた。

「ええ。合図ねっ」

頷いたフィシャリ姉は、足元に置いていたランプを持ち上げ、ランプの光を布で隠したり取り払ったりを、震える手でゆっくりと何度か繰り返した。

すると向こうも決められた通りに返してきた。

「間違いない、物資の取引相手だっ」

「「うおおおおお」」

北西の州担当のガンディ兄は、バナと一緒に周りの仲間に抱き着かれて押し倒された。

「よし、明日は“輝ける白”を港に着けるぞっ」

「うおおおおおお」

船上はもうお祭り騒ぎだ。

皆で飛んだり跳ねたり、海に飛び込んだりしまくったっ！

「野郎どもっ！ 夜勤の者以外全員就寝っ！」

「はいつ姐御っ」

フィシャリの号令の元、バナは寢床に入った。

翌朝、“輝ける白”はあっちこっちにヨロヨロしたが、バナの読み通りに入港した。

「お久しぶりです」

「来てくれてありがとう」

「約束は守りますよ」

ガンディ兄が、相手の人としっかり握手を交わしている。

その後ろの船の上から万歳三唱を行い、口笛、指笛出来るお囃子を飛ばしまくった。

そんな中、目の色変えてたのがダニャル兄だ。

「例のものは？」

「……ここに」

ガンディ兄と握手していた人が木彫りの首飾りを出して来た。

「貸してくれっ」

ダニャル兄が引ったくり、手元にある8つの舟形の木彫りから一つを取り出し型を合わせ、ぴったりと綺麗に嵌ったのに、さっそく座り込んで手直ししてる……。

そんなダニャル兄に、北西の州の人は引いていたが、浮かれたバナはついふざけて、

「合言葉は？」

「そ、そんなの決めていたかつ？」

「山といえば？」

「川だっ！」

何だか可笑しくて笑っちゃった。

皆もつられて大笑いしてくれた。

「ではこちらの物資を渡すわね」

フィシャリ姉の号令に、慌てて荷物運びに皆で走った……。

闇市場

8州それぞれの契約を担当した幼馴染達が、航海からしばらく経ったある日言いだした。

「エイブ、オレ達ちよつと出掛けてくる」

「え、どこへ？」

「契約先の様子を見る」

「えゝ?!」

さも当然といった調子のガーンディに僕は驚く。

「お前、気にならないのかよ」

「そりゃあなるけど」

「オレは気になってしょうがないから、ちよつと様子を見に行ってくるわ」

「ぼくも」

ガーンディが言い出したからというわけではないだろう、エッドもそれに倣った。

「でもさあ。冬が近いんだよ？」

隣の北西の州ならともかく、西南や東南の州だと遠すぎる気がするけどなあ。

「おう！ だから雪が降る前に急いで行って帰ってくるさ」
「う~~~~ん」

「すぐに戻るって」
「……分かった」

渋りつつも、結局折れた。

実は僕も気になってるし、担当のガンディやエッドにしたら尚更だろうから、しょうがないよな。

「これ、持っててくれ」

引き出しの中からお金を出し、それぞれに配る。

「何だこれ？」

「お金さ。これで旅が楽になるように、出先の州でそれぞれ馬とか鉈とか斧とか買ってくれないか？」

「買っ？」

疑問顔をしている2人に僕は頷く。

「うん。北の州には皆に使ってもらえるような馬や鉈の予備はないけど、それぞれの州になら1つずつぐらいあるんじゃないかと思うてさ」

「なるほど」

どうやら、これだけの言葉で理解してもらえたようだ。
僕はさらに続ける。

「それで、もし譲ってもらえる余力がありそうだったら、教えてくれないか？」

「ああ、北の州用に頼むのか」

「うん。僕等には新しく作る技術が残ってないから、そろそろ道具がね……」

舟関係も親方が生き残っていなかったら、海へ出るのはもっと遅くなっていたに違いない。

他州に少しでも多く、色々な技術を継いだ人々が、生き残ってくれていればいいのだが……。

「そうだな」

「気をつけとく」

「うん、頼む。気を付けて行ってきたくれ」

「「おう」」

まあ、悲観的になる事はないよな。

僕らはお互いに笑顔を浮かべた。

無事に冬が来る前に、皆は北の州にお土産付きで帰ってきた。

「馬なら少し融通が利くって言うてくれたよ」

「こっちは刃物だな」

「鍋釜なら何とかするって」

頼んでみて正解だった。

少しだろうが何だろうが、心強い返事に嬉しくなる。

「助かる。北の州の皆に、新しい道具が手に入りそうだって伝えてくれ」

「「おうっ」「」

気が付いたら、幼馴染達はそれぞれの契約を担当した州をちよくちよく訪れていた。

双方で連絡を取り合い、物資の輸送回数は少しずつ回を重ねて行った。

担当者の幼馴染達は8州の陸から、バナやフィシャリは海から見た様子を逐一報告してくれるので、各州が変わっていく様子を僕は知る事が出来た。

その日も帰って来るなり、ガンディが言ってくる。

「えゝ、オレ担当の北西の州では……っ！」

「うんっ？」

しかも嬉しい知らせらしい、僕は期待を込めて頷いた。

「なんとっ！」

「うんうんっ」

「なんとなんと、なななんと……っ」

「……もったいぶらずに早く言えよっ」

焦れて急かした僕に、ガンディが胸を逸らせて発表する。

「闇市場の売れ行きが順調すぎて、次の物資を予約したいって言うて来た〜っ！」

「おおおっ！」

するとガンディに続けとばかり、エツドも声を上げる。

「ぼく担当の南西の州も同じくっ！」

「うお〜っ！ 凄いなっ！」

どうやら闇市場は予想以上の盛況ぶりらしい。

するとフィシャリが嬉しそうに口を開いた。

「何だか、会うと分かるのよ。他州の人達の表情が変わって来てるなって」

「変わったって、どんな風に？」

僕はわくわくと続きを促す。

「一言でいうと、ノビノビしだした……かな」

「あ〜そうかもっ」

「そうだよなあ」

「闇市場を覗きに行くと、声が前に比べて明るくなったなって、おれも思った」

フィシャリの意見にみんなが次々に同感し、ダニヤルもうんうんと頷く。

「へー。やっぱり物があるから？」

「もちろん、それもあるんだろうけど……」

「うん、やつぱあれだなあ。やばくなったら北の州へ行けばいいんだって、気持ちの余裕が生まれたからかなあ」

「それいいな。今度行ったら、いざとなったら北の州へ。って言うところ」

「熱烈大歓迎ですって？」

「うんっ」

皆と一斉にドツと笑ってしまった。

「なるほどな」

その説明に僕は納得する。

僕にとってのおばあちゃん存在が、他の州にすると北の州になつてゐるって事か。

と、すると北の州は変わらずに在り続け、期待に応え続けなきゃいけない……。

もちろんこれから連絡は取り続けるつもりだけど、北の州が出せる援助可能な食糧には限りがある。

とはいえ何も運ばずに、せっかく生まれた気持ちの余裕が萎んでしまつては勿体無い。

口だけではなくて、物資という目に見える形もあった方が誰だつて安心出来る。

「エイブ。食糧だけじゃなくて、お互いに特産品の売り買いもしたらどうだい？」

何かないかな？　　と思い悩んでいた僕に、おばあちゃんが提案してきた。

「特産品？」

「昔はそれぞれ得意としている物があつたんだよ。　北の州なら海産物や運輸のようにね」

「刃物なら。鍋釜なら。　って他州の人が言ってくれたみたいにか？」

「そうだよ。　くじ引き制度がなくなったとはいえ、ダニヤルが作つてる木彫りみたいに、好きな人はずっと続けてると思うよ。　売れるとなれば、ますます特産品の復活が進むんじゃないかね」

さすが北の賢者。

やっぱり目の付け所が違ふよなあ。

「落ち着いたら技術取得の希望者を送りたいとは言つてあるけど、廃れてちゃ教えて貰ふ事も出来なくて困るよな」

「色々教えて貰いたい物が北の州は一杯あるからな」
「だよな」

でも特産品として何があったかなあ。

な〜んて考えてたら、皆からぼんぼんアレはコレはと品物候補が上がる。

「そういえば昔はもつといい茶碗があったよな。箸で叩くと、いい音がしてさっ」

「あ〜あったあった。あれって、どこの州の特産だったんだろなあ？」

「そんなのより、ふんわり優しい肌触りの布よっ」

「いいよね〜あれ。ほし〜いっ」

「あと何にしても色がさ〜」
等々。

しばらくその話題で盛り上がり、皆それぞれ好きな物を頭に描いてほわ〜んとする。

「次に会った時に、相談してもらってもOK？」

「賛成〜了解〜」

それで今回の座談会は終了かなと思ったのだが、エツドが気になる事を言い出した。

「どうも小耳に挟んだんだけど、闇市場が盛況なせいで、権力を握ってる連中が一人占めしてた方の物資が売れなくなっているらしい」

「当たり前と言えば当たり前だけど……怒るね、それは」

「だろなあ」

「闇市場お取り潰しとか？」

「表立つてはまだ何もないけど、これから要注意かな……と」

「うん」

取引相手に北の州からも注意を促し、連絡を密にするという事でとりあえずお開きとなった。

闇市場（後書き）

闇市場

トントントン……カチャッ

「入って」

「失礼します」

初めての客だ。

きちんと説明せねば。

「あの……こちらでコメが手に入ると聞きました」

「ああ、ある。ただし絶対信用できる者以外には、口外しないと約束してほしい」

「なぜ？」

「ここにある物資は北の州に逃げ込んだ甥っ子が、州長に無理言っ
て分けて貰った物だ」

「北の州?! 無事なのですか?!」

驚くのも無理はない。

だがもつと驚くべき話がある。

「何とかギリギリ生き残ったらしい。2代の州長のお陰でな」
「2代」

「ああ。今の州長は2代目だそうだ。先代は過労で亡くなったらしい」

「……」

しかも、親子で2代なのだという。

親子なら尚更、州を我が物顔にしてもおかしくないのに、自州の現状を思うと、どうして北の州はそうならなかったのかが不思議で仕方ない。

「北の州もギリギリなんだ。だから無償で分ける訳にはいかない。そこでだ。何か品物になる物を代わりに預かって、それを売りに出させてもらう。」

いくらで売るかは其方次第。その代金分だけ食糧を分けさせて貰っている」

「今お支払しなくてもいいのですか？」

「支払って貰えるなら助かるが……無理だろう」

「はい……」

「何をいくらで預かったか、きちんと記録を残させてもらう。いつかゆとりが出来た時に買い戻しに来てくれればいい」

「はい……」

「泣くな……。初めて助けの手が差し伸べられたんだ。喜んでくれ」
「はい……」

連絡手段。

「どう？ 元気かな？」

ここ最近の僕は、青年の家へちよくちよく様子を見に行く。

「うん！ 大丈夫！」

「みんな元気だよ！ 任せてっ！」

主に世話をしてくれているヘイズルとアイリンが返事をしてくれる。

良かった。

取引先の八州から預かった大事な伝書鳥だ。

亡くしてしまったら、緊急連絡用として伝書鳥を僕等に預けてくれた他州の人達に申し訳が立たない。

でも、最初は大騒ぎだった。

「お兄ちゃんっ！ コレ何？」

輸送の船旅から帰ってきたバナが州長館に飛び込んできて、僕に鳥籠を差し出した。

「……鳥？」

「緊急連絡がある時に使ってくれて渡されたっ！」

「緊急連絡？」

いや、確かに他の州長達の動きがおかしいって聞いたから、取引場所も何カ所か候補を挙げてもらい、それにもないその日の取引場所も、ランプの合図で指定出来るように、何種類か用意してほしいと頼みはした。

後は譲ってもらった馬を使って、連絡を取り合えば大丈夫だと思っただけだが、緊急連絡用の鳥？

「これを与えてくれって渡されたんだけど、もう残り少ないの。エイブお兄ちゃんどうしよう？」

「……雑穀？」

バナが見せてくれた餌には、分かる範囲でだが何種類かの草や木の実らしき物が混ざっていた。

「とりあえず、おばあちゃんだっ！ 持っていくぞっ！」
「うん！ エイブお兄ちゃんっ！」

分からない事は、北の賢者っ！
バナと僕は鳥籠を持ち、慌てて青年の家に向かった。

「伝書鳥だねえ。うん。元気そうだ」
「「伝書鳥？」」

きょとんとした僕らにおばあちゃんは説明してくれる。

「伝書を託して放つと、相手に伝書鳥が届けてくれるのさ。もっとも一方通行が多いね」

「一方通行？」

「放すところの子等が巣だと思つ場所に帰るんだよ。バナ、この子はどこで預かつたんだい？」

「北東の州で」

「うん。じゃあ北東の州に帰るだろう。北東の州に伝言がある時、伝書鳥に託して放てば届けてくれるさ」

「へえ~~~~~」

さすが北の賢者。

おばあちゃんが居なかつたら、せつかく預けてくれた伝書鳥も、有効活用出来なくて宝の持ち腐れになる所だった。

「おばあちゃん、この子はどうすればいい？」

「逃げないようにして、大きな鳥籠の中で飼うんだね。病の前は北の州でも飼つてたし、どこかに飼い方の本があるはずさ」

「分かつたっ」

バナが頷くと、横から2つの声が割つて入る。

「バナ、手伝うよ」

「ヘイズル、アイリン、助かるっ。皆も本探し手伝つてっ」

「うんっ」

こうして青年の家に残されていた伝書鳥の飼育法の、本頼りな試行錯誤の飼育が始まった。

調べると、北の州は流行病が猛威を振るっている間に、食糧にしたり逃がしたりで、この10年伝書鳥の飼育はなされなかったし、詳しい飼育の仕方が分かる者ももう居なかった。

「野生の伝書鳥を捕まえて、伝書を運ぶように出来るかな？」
「おお。いいな。やってみようぜ」

そうと決まれば準備だっ！

ジェイカブと一緒に青年の家の前で餌を撒き、その上に籠を置き棒で支え、棒に紐を付け、その紐の先を持って青年の家の陰に隠れた。

「来ないね」
「来ないな」

「エイブお兄ちゃん……」
「ジェイカブ兄……」

「何だい？」
後ろからヘイズルとアイリンが声を掛けてきた。

「そこはめったに伝書鳥来ないよ」
「捕まえるなら、林の手前とか良いと思うよ」

しかも2人は手に何羽かの伝書鳥を入れた鳥籠を手をしている。

「お前等行動早いなあ」

「もう捕まえて来たんだ」

ジェイカブと僕がすっかり感心して言うと、ヘイズルとアイリンはだってねーっと捕まえたわけを教えてくれた。

「一羽だけじゃ、さみしいし」

「野生の伝書鳥を捕まえて、卵を産んでくれたら増えるかなって思
って」

その答えに、当然伝書鳥に関して新たな疑問が沸く。

「増やせるか？」

「ジェイカブ兄、聞いてきてよ」

「北東の州の人にか？」

「うんっ」

「分かった。今度聞いてきてやる」

「やったあ！」

「ジェイカブ兄、よろしくねー！」

楽しそうに、ヘイズルとアイリンは青年の家に戻っていった。

「大変だねえ。頑張ってたっ」

僕はジェイカブの肩を叩く。

「伝書鳩は使えそうなんだろ。ちゃんと聞いてくるさ。任せろ」

ジェイカブも僕の肩を叩き去っていく。

確かに僕は伝書鳩を使えそうだと思ってたけど、何で皆分かるんだろう……。

不思議だ……。

最初に伝書鳩を預けてくれた北東の州の人に、担当のジェイカブが色々聞いて来たり、取引先すべての州から伝書鳩を預かってきたり預けたりして、取引のある8州との緊急連絡用として、伝書鳩を使うようになった。

まだ伝書に使える鳥の数が少ないので、あくまで緊急だけで使うに越した事はなかったのだが、少し前から懸念していた通り、州長・またはその周りの腰巾着達による、闇市場の摘発が行われ始めてしまったらしい。

「案の定来ちゃったか」

僕は唸ったが、今はまだそれほど悪い事態にはなっていないらしい。

「闇市場はもう生活していく上で欠かせない。だから摘発してくる連中を快く思っていないけど仕方なくお勤めしてる人が、こっそり日時を教えてくれるって」

「あと、船に対しての摘発日も知らせる……って書いてあるよ」

「うん。ヘイズル、アイリン、ありがとう。また着たら教えてくれるかな？」

「分かった」

「エイブお兄ちゃん頑張ってね」

「おうっ」

「この子達は、北西の州の子達だよ」

「うん。今度ガンディ兄に、預けないとね」

遠くから知らせを届けてくれた伝書鳥の、世話をしながらしゃべるヘイズルとアイリンの声を聞きながら、州長館へ僕は戻った。

伝書鳥に手紙を付けて送って来てくれた誰かが、気遣い無用を伝えてくれる。

すでに内通者を作つてあるとは、さすがだ。
ちゃんと摘発対策を考えてくれていたんだなあ。

「そか。なら北の州としては傍観？」

「とりあえず、こつちが出来る事は今のところなし。後はバナ達により一層気を付けるように伝えるだけだな」

「そうだな」

念の為、摘発日には他州での接触は避ける事にした。

北の州にえらく恩を感じてくれているらしい取引先の州の人は、僕等を危ない目に合わせないよう、最大限に回避する努力をしてくれている。

その思いに応えないといけないと、僕は気を引き締めた。

連絡手段。（後書き）

夜勤

今日は私が夜勤の日。

しっかり陸の合図を見逃さないよう、ランプの明かりをじっくり探す。

「フィシャリ、これが新しいランプの合図だから、覚えて皆に伝えてくれ」

前回航海から帰った時に、エイブから渡されたランプの暗号。

3つの部分から構成されている。

まず最初が受取できるか。

次に、どこの港で受取出来るか。

そして最後が、安全な航海が出来るか。

「今回は候補に挙がっている港をちゃんと見ておかなきゃね」

静かに一人心地る。

昔私達が恐れたのは食事抜きのパ。

それさえも恐ろしくて小さくなっていた。

エイブが居なければ、守ってくれる者が居ない私達の生活は耐え難い物になっていたに違いないと思う。

そんなエイブは、私達だけでなく他州の人達まで助けようと動き出した。

他州の人達は、そんなエイブに恩を感じてくれるのか、私達が危険な目に合う事ないよう、正確な情報を集め伝えてくれる。

情報を流している事がバレた時、彼等の場合は、自分達の命が危ないのに……。

「私に出来る事は、物資をきっちり届ける事」

しっかり心に刻んでおかなければならない。

彼等の思いに応えるには、それしかないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6494x/>

白く輝く帆の下で ー北の州長の奮闘記ー

2011年11月24日16時49分発行